泉大津市文化財調査報告９

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報２

１９８４・３

泉大津市教育委員会

泉大津市文化財調査報告９

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報２

１９８４・３

泉大津市教育委員会

例　　言

1．本調査概報は、泉大津市教育委員会が、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。

2．本調査は、泉大津市が国庫補助事業および、大阪府補助事業（総額 5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として、計画・実施したものである。

3．本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者　泉大津市教育委員会教育長　藤原勇三

調査担当者　泉大津市教育委員会社会教育課　坂口昌男

調　査　員　楠山享司・貴志正則

調査補助員　柴原克夫・池田　毅・小林　清・大橋陽子・畑中尚子

事　務　局　泉大津市教育委員会社会教育課(課長鈴木実)

4．本事業は、昭和58年度事業として、昭和58年4月4日に着手し、昭和59年3月31日に完了した。

5．本調査概報では、遺物実測図および遺物写真には、共通する番号をつけ、本文においてもこの番号を使用した。

目　　次

第１章　1983年度調査内容…… 1

第２章　地理・歴史的環境…… 4

第１節　泉大津の地理的環境 …… 4

第２節　泉大津の歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査報告…… 11

第１節　豊中遺跡 …… 11

1　調査に至る経過…… 11

2　調査結果…… 12

第２節　板原遺跡…… 15

1　調査に至る経過…… 15

2　調査結果 …… 16

第１地点 …… 16

第２地点 …… 16

第３節　虫取遺跡 …… 17

1　調査に至る経過…… 17

2　調査結果 …… 18

第１地点 …… 18

遺構 …… 18

遺物 …… 20

第２地点 …… 25

遺構 …… 25

遺物 …… 26

第３地点 …… 29

遺構 …… 29

遺物 …… 31

第4地点 …… 33
遺構 …… 33
遺物 …… 35
第5地点 …… 35
引用文献 …… 37
遺物観察表 …… 39

挿表・挿図

表1 1983年度調査一覧表 …… 1
第1図 泉大津市地形図 …… 4
第2図 周辺遺跡の分布図 …… 6
第3図 豊中遺跡調査地点図 …… 11
第4図 豊中遺跡調査位置図 …… 12
第5図 豊中遺跡第1トレンチ断面図 …… 13
第6図 豊中遺跡第2・第3・第4トレンチ断面図 …… 14
第7図 豊中遺跡出土遺物 …… 15
第8図 板原遺跡調査地点図 …… 15
第9図 板原遺跡第2地点トレンチ断面図 …… 16
第10図 虫取遺跡調査地点図 …… 17
第11図 虫取遺跡第1地点位置図 …… 18
第12図 虫取遺跡第1地点遺構図 …… 19
第13図 虫取遺跡第1地点溝4・落ち込み3遺構図 …… 20
第14図 虫取遺跡第1地点出土遺物 …… 21
第15図 虫取遺跡第1地点出土遺物 …… 22
第16図 虫取遺跡第2地点位置図 …… 25
第17図 虫取遺跡第2地点東トレンチおよび西トレンチ断面図 …… 26
第18図 虫取遺跡第2地点出土遺物 …… 27
第19図 虫取遺跡第3地点位置図 …… 29

第20図　虫取遺跡第3地点東トレンチ断面図……30
第21図　虫取遺跡第3地点南トレンチ・北トレンチ断面図……31
第22図　虫取遺跡第3地点出土遺物……32
第23図　虫取遺跡第4地点位置図……34
第24図　虫取遺跡第4地点東トレンチ断面図……34
第25図　虫取遺跡第4地点出土遺物……35
第26図　虫取遺跡第5地点トレンチ断面図……36

図　版

1……豊中遺跡第1トレンチ・板原遺跡第1地点トレンチ
2……虫取遺跡第1地点溝4全景・土器出土状態
3……虫取遺跡第1地点土器出土状態・西トレンチ土器出土状態
4……虫取遺跡第1地点遺構全景・第2地点全景
5……虫取遺跡第3地点全景・第5地点トレンチ
6・7……出土遺物

第1章　1983年度調査内容

昭和58年度（1983年度）の調査報告とするのは、泉大津市教育委員会が国庫補助対象事業の一環として、市内に所在する各遺跡において実施した、立会調査・発掘調査の調査結果である。実施日・調査地番・遺跡名・調査内容等については、「1983年度調査一覧表」に示しておいた。報告を必要とする発掘調査に関しては、資料提供という意味で後述しておく。　（坂口）

表1　1983年度調査一覧表　（但し、1983年4月4日から1984年2月29日）

月　日	調　査　地　番	遺　跡　名	調査内容	備　　考
4・4 〜 5・9	我孫子221－1 穴山416・417	虫取遺跡	発掘調査	縄文式土器の包含、弥生時代・溝、古墳時代の遺構と須恵器検出
5・10	寿町623－7	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
5・17	助松町三丁目753－22	助松遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
5・17	助松町三丁目753－23	助松遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
5・23	北豊中町二丁目2－2	七ノ坪遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
5・24	池浦町五丁目474－1	穴師遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
6・3	宇多1046－60	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
6・10	北豊中町三丁目 977－1・－2	豊中遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片・須恵器片、中世の瓦器片検出 遺構は認められず
6・13	宮町139－1	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
6・16	北豊中町三丁目5－22	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
6・17	旭町84	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
6・24	森町二丁目22－28	池上・曽根遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・4	森町一丁目10－16	池上・曽根遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・12	豊中841－2	古池遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・13	北豊中町二丁目366－98	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・14	助松町三丁目753－22	助松遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・15	北豊中町三丁目979－1	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・19	宇多64－4	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
7・27	板原	板原遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず

月　日	調　査　地　番	遺　跡　名	調査内容	備　　考
8・1	虫取72—2	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
8・10	板原326—3	虫取遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片検出 遺構は認められず
8・31	北豊中町二丁目366—29	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・9	旭町22—14	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・10	北豊中町三丁目978—16	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・12	板原64—3	板原遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片・須恵器片、平安時代の黒色土器片検出 遺構は認められず
9・13	我孫子61—6	穴田遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・16	池浦町四丁目173—10	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・26	東雲町78—4	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・27	北豊中町二丁目366—98	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
9・29	東豊中町二丁目960—14	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
10・3	板原64—2	板原遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
10・19	下条町126	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
10・24	板原213—3	板原遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
10・24	板原213—3	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
10・29	池浦町五丁目474—10	穴師遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
11・22	虫取14—4	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
11・24	森町二丁目20	池上・曽根遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
11・25	北豊中町二丁目366—29	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
11・30	曽根町一丁目6—7	池上・曽根遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
12・2	宇多1048—78	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
12・5	豊中366—33	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
12・7	下条町158—3	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
12・13	東雲町73—1	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
12・16	虫取113	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
1・14	下条町8	東雲遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
1・18	下条町614—16	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
1・24	穴山78—14	板原遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず

月　日	調　査　地　番	遺　跡　名	調査内容	備　　考
1・27	宇多1048—74	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・16	板原1048—78	虫取遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・18	下条町614—16	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・20	豊中978—16	豊中遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・23	池浦町4丁目173—10	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・24	寿町404—3	池浦遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず
2・29	尾井千原143—16 森311—16	大関遺跡	立会調査	遺構・遺物等認められず

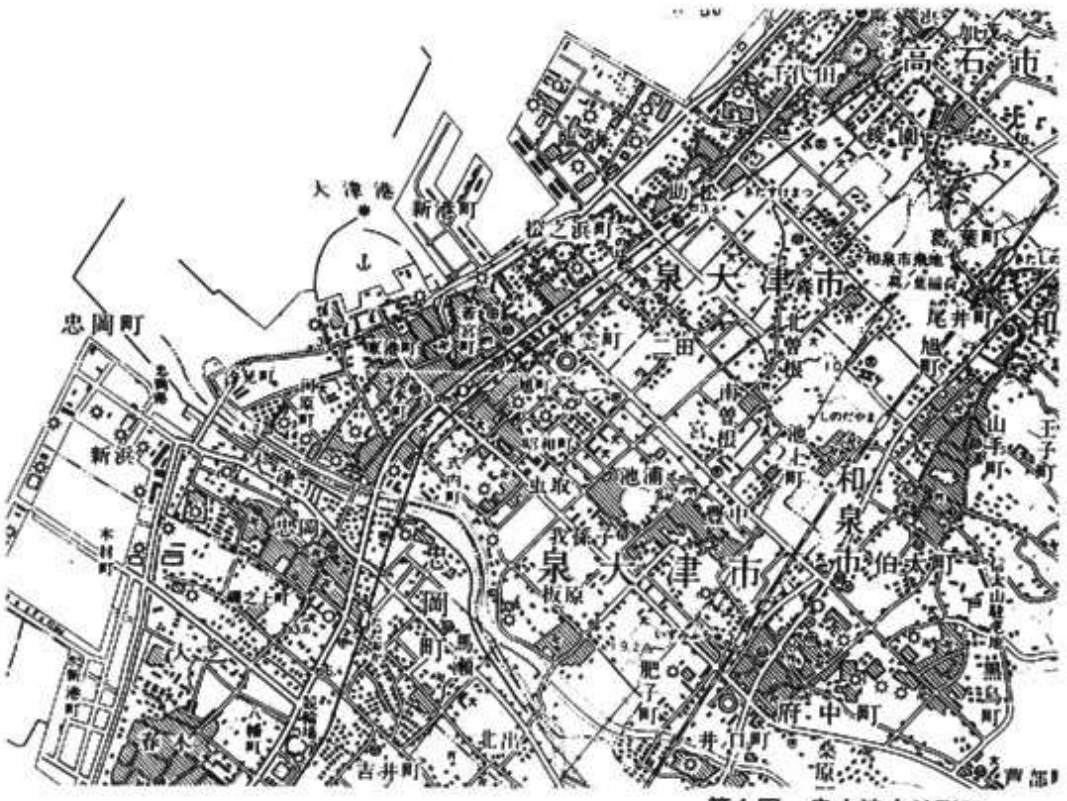
第２章　地理・歴史的環境

第１節　泉大津の地理的環境

大阪府泉大津市は、大阪平野南部の海岸部に位置する。市の西側は大阪湾に面し、北側を高石市、南側は大津川を隔てて泉北郡忠岡町、東側を和泉市と隣接しており、山間部は含まない。面積が11.53㎢、人口は68,494人（昭和59年１月現在）の小規模な都市であるが、昭和17年府下で７番目に市となっている。私鉄南海電鉄本線は市を南北に横切り、大阪・和歌山間を結んでいる。そして泉大津駅は、大阪難波駅まで急行で約20分と、非常に近距離にある。

市内西部の海岸沿いには、この、南海電鉄本線と平行して、府道堺阪南線・大阪臨海線の道路が、東部には、国道26号線（第２阪和国道）が、それぞれ延びている。また、市内を東西に結ぶ道路として、松之浜曽根線・泉大津中央線・泉大津枌河線が走っている。

泉大津の市街地は、府道と南海電鉄本線に沿って、古くより住宅と商工業用建物で形成されてきた。しかし、昭和45年に開催された日本万国博覧会を契機に、大阪南部は商業都市大阪のベッ



第１図　泉大津市地形図

第１図　「この地図は建設省国土地理院発行の５万分の１の地形図を使用したものである」

ドタウンとして注目されだし、市域全体が市街地化区域となった。この為、水田地帯が広がっていた市の東部にも宅地開発の波が押し寄せ、市街地化が進行している。

この地域の地場産業は、毛布を中心とする繊物工業であるが、近年、海岸側が堺・泉北臨海工業地帯として埋め立てられ、カーフェリー等が発着するなど、港湾の都市としても発展してきた。さらに現在は、泉州沖の新空港建設計画に伴ない、交通網の整備や土地開発などがめまぐるしくおこなわれつつある。（池田）

第2節　泉大津の歴史的環境

泉大津は古来より、小津の浦と呼ばれ、和泉国府に近い津として栄えていた。

和泉地域は、瀬戸内式気候に属しているため、降雨量も少なく、農耕の発展に伴なって丘陵部や平野部に、数多くの溜池が造られている。しかし現在では、市内に20数個あった溜池の大半が埋め立てられ、住宅・団地・工場・公園・小学校・公民館などに転用されている。

泉州沖の新空港建設計画による交通道路の整備、宅地造成による開発などに伴なって、埋蔵文化財の発掘調査が各地で行なわれ、新発見が報告されている。

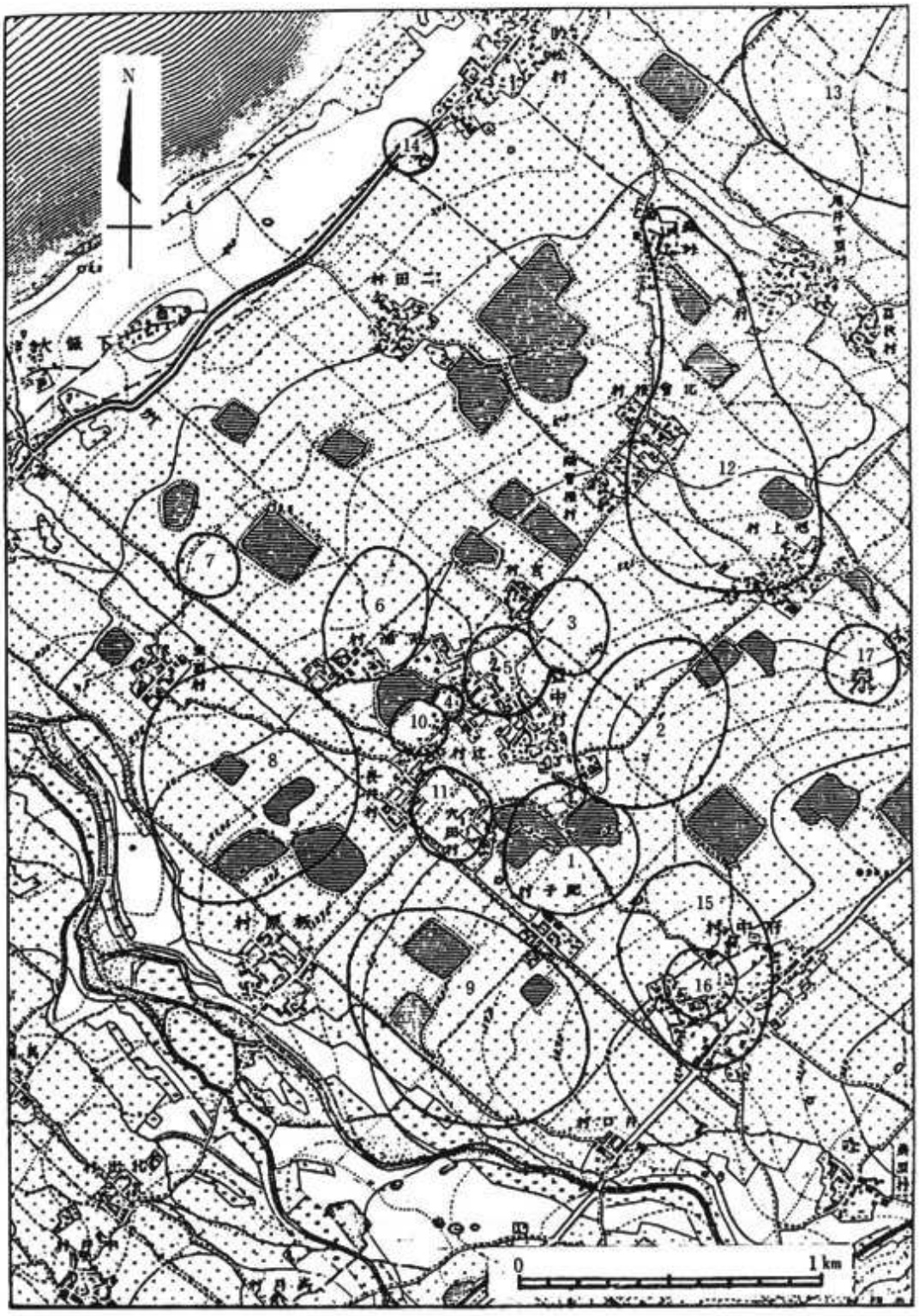
泉大津市文化財の昭和58年度発掘調査概報を報告するのにあたり、市内を中心に堺市、高石市、和泉市、岸和田市、貝塚市に所在する各遺跡を時代毎に紹介しておく。

旧石器時代

昭和24年に群馬県桐生市岩宿において、相沢忠洋氏により、ヨーロッパの旧石器によく似た遺物が、洪積層内より発見された。それまで日本には旧石器文化の存在はないと考えられていたが、旧石器の発見層が、最も古いと考えられていた縄文式土器層よりも下層の、関東ローム層からの出土であったため、日本においての旧石器時代が確証された。その後、各地においてこの文化に属する遺物が続々と発見され、石器製作技法や形態によって、石器文化の差異を明らかにされつつある。

日本における旧石器時代は、約10万年前から約1万2000年前までの間で、洪積世に属する。この時代の人々は、狩猟採集により一定の領域を移動していたようで、住居跡も少なからず発見されている。

泉大津市内においては、現在のところこの時代の遺物は発見されていない。隣接する和泉市大野町において、昭和40年に大阪府立泉大津高等学校地歴部が、発掘調査を行なった結果、サヌカイト製のナイフをはじめ石核・剥片約30個が発見されている。調査場所は大床遺跡と名付けられ、その後開墾が進み果樹園になっている。付近は海抜約390mの高所で急傾斜の険しい地形である。



1.古池遺跡　2.曇中遺跡　3.七ノ坪遺跡　4.六師小学校校庭遺跡　5.六師遺跡　6.池浦遺跡
7.東雲遺跡　8.虫取遺跡　9.板原遺跡　10.六師薬師寺跡　11.六田遺跡　12.池上曽根遺跡　13.大園池跡
14.助松遺跡　15.府中遺跡　16.和泉国府跡　17.伯太北遺跡

第2図　周辺遺跡の分布図

高石市大園遺跡からは、後期旧石器時代のナイフ形石器の他、旧石器時代終末期から縄文時代草創期・早期に見られる有舌尖頭器が1点出土している。[1]

和泉市伯太北遺跡から有舌尖頭器とナイフ形石器の出土がある。和気遺跡においても翼状剝片が出土している。[2] また、万町北遺跡においてもこの時代の石器が出土している。

その他に、堺市野々井遺跡、皿池遺跡、百舌鳥本町遺跡、岸和田市西山遺跡、琴山遺跡、葛城山頂遺跡、海岸寺山遺跡などで、旧石器時代に属すると思われるナイフ形石器や有舌尖頭器や剝片が出土している。

縄文時代

縄文時代は旧石器時代に続く時代であり、日本で最初の土器文化である。約1万2000年前から約2300年位前の期間を有する。特に中部山岳地帯、関東、東北地方に数多く見られ、文化の発展過程を知ることができる。植物の採集から栽培への移行により、生活の安定に伴なう人口の増加や居住地の定着に対応して、土器の器種が用途に応じて増え、装飾も加えられるようになった。近畿地方においてもその遺跡は発見されているが非常に少ない。自然環境や立地条件に大きく左右されたのであろう。

泉大津市内においては、この時代の明確な遺構は今のところ発見されていないが、土器片は検出されている。古池遺跡内に存在した古池・上池は、河川を堰止めて造られた池であるため、その底には砂利層が見られた。上池部分の河川のベースを形成していた砂利層より縄文時代中期末に属する土器片が出土した。[3] また、同遺跡の他の位置の砂利層からも数片が発見されている。隣接する豊中遺跡からも後期・晩期の土器片が出土した。[4] 板原遺跡においては、「中津式」に対応する時期と、それに近い時期の波状口縁片が1点ずつと、底部片が1点出土した。これらは炭・灰・焼土を伴って発見された。[5] 定住地かキャンプサイトの跡かは今後の調査によらなければならない。虫取遺跡からも晩期の土器片が出土している。

和泉市においては、信太山丘陵から前期の打製石匙、伯太北遺跡で中期から後期の土器、府中遺跡から石棒・石鏃や後期中葉の土器、[6] 池上曽根遺跡からは後期に属する内側に肥厚ぎみの波状口縁部を持つ深鉢形土器の破片1点、晩期と思われる口縁部直下および肩部に低い貼付刻み目突帯を施す粗製土器片1点が出土している。[7] また、万町北遺跡からも後期から晩期の土器片と石器が出土している。[8]

岸和田市においては、葛城山頂から中期の土器、箕土路遺跡から中期初頭の「爪形文土器」、春木八幡山遺跡で後期から晩期にかけての土器が出土している。また、西山遺跡、下池田遺跡からも土器片が出土している。

堺市においては、四ツ池遺跡で後期から晩期の土器が出土している。また、鈴の宮遺跡、西浦遺跡からも土器片が出土している。

他に、貝塚市畠中遺跡、新井ノ池遺跡、河池遺跡や高石市大園遺跡、泉佐野市三軒屋遺跡、岬町淡輪遺跡などがある。

このように和泉地方において丘陵部や台地上・砂丘などから遺物が発見されており、遺構も数ケ所で検出されているが、この地方の縄文時代は未だ充分に把握されていない。しかし、次の弥生文化開始の下地は既に出来ていたと考えられる。

弥生時代

稲作農耕と金属器使用が始まったのが弥生文化の特徴で、ＢＣ200年～ＡＤ300年頃の期間である。北九州に始まった弥生文化は急速に東進し、近畿地方に伝わる。前期において、堺市四ツ池遺跡では縄文晩期の土器に籾痕がみとめられることから、より早くその文化を取り入れ、和泉における最初の米作りを行なったと考えられる。

泉大津市曽根から和泉市池上におよぶ池上曽根遺跡で、前期中段階の土器や新段階の土器の出土があり、後期に至る集落が発展しながら継続した様子が、前期から中期にかけて掘られた集落を囲む人工の溝の規模と、それが掘り直されていることからわかる。[9] 池上曽根遺跡は和泉地域の弥生文化の中心で、弥生時代の集落を代表するものである。池上曽根遺跡より西に隣接する池浦遺跡は、前期中段階に出現した集落で、[10] 低位段丘に位置しており、人工的Ｖ字溝で住居区を限定していたと思われる。また、虫取遺跡でも前期から中期にかけての土器が人工的Ｖ字溝から多量に出土している。七ノ坪遺跡ではこの時代に属する水田跡が検出されている。[11] 穴師小学校校庭遺跡から、中期の壺棺が出土している。[12] なお、大阪府教育委員会の発掘調査により、古池遺跡要池から、有鉤銅剣が１個出土している。遺物散布地としては、助松遺跡がある。

和泉市万町北遺跡では中期の円形の竪穴住居と方形周溝墓が発見された。[13]

他に、前期に始まる遺跡として、堺市諏訪森遺跡、鳳遺跡、岸和田市春木八幡山遺跡、加守三味山遺跡などがあり、中期に始まる遺跡として、和泉市府中遺跡、和気遺跡、高石市大園遺跡、岸和田市田治米遺跡、箕土路遺跡、畑遺跡、上松中尾遺跡などがあげられる。後期になると、丘陵部にも集落が作られるようになり、これを「高地性集落」と呼び、和泉市観音寺山遺跡、[14] 惣ノ池遺跡[15]がこれに相当する。これらの遺跡は標高60m ～70m の丘陵上に位置している。後期の遺跡として他に、堺市田出井町遺跡、三国ケ丘遺跡、金岡遺跡などがある。

古墳時代

3・4世紀から7世紀までの、高塚墳墓に代表されるこの時代は、古代国家の確立の一時期である。この時代は古墳を中心として前期・中期・後期の3期に分けられる。

泉大津市においては、現在のところ古墳は見あたらないが、以前には塚らしいものが存在していた可能性がある。

前期古墳としては和泉市黄金塚古墳が有名である。後円部に3個の粘土槨を持つ前方後円墳で、中央の粘土槨から景初3年（中国三国時代の魏の時代の年号）の銘のある画文帯神獣鏡を出土している。他に岸和田市摩湯山古墳、久米田古墳群、また前期から中期にかけての和泉市丸笠古墳がある。中期古墳としては濠をめぐらした帆立貝式の墳丘を持つ和泉市貝吹山古墳や堺市百舌鳥古墳群のような巨大古墳がある。後期古墳としては高石市高木車塚、和泉市信太山千塚、堺市陶器千塚などがあげられる。

泉大津市内の集落遺跡としては、豊中遺跡、古池遺跡、七ノ坪遺跡、東雲遺跡、虫取遺跡がある。七ノ坪遺跡においては集落跡と共に弥生時代の墓形態の1つである、方形周溝墓や土壙墓がこの時代に入っても造られている。このように弥生時代からの系譜を引く方形周溝墓を造る集団と、黄金塚古墳や丸笠古墳を築いた集団とは異なりをみせるものと思われる。また、七ノ坪遺跡では前期の水田跡が確認されている[17]。泉大津高等学校より北東の地区の調査では、遺構面より弥生第Ⅴ様式の甕の出土、溝からは古墳時代の庄内式から布留式の土師器が出土している[18]。東雲遺跡は海岸部に近い遺跡で、5世紀頃の竪穴住居跡2軒と井戸1基が検出されている[19]。遺物散布地としては、板原遺跡、助松遺跡、穴師遺跡がある。

和泉市万町北遺跡では後期後半の方形の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が発見されている[20]。

弥生時代からこの時代にかけて続いた遺跡としては、豊中遺跡、古池遺跡、七ノ坪遺跡、和泉市惣ノ池遺跡、伯太北遺跡がある。

他に、和泉市府中遺跡、上町遺跡、高石市大園遺跡、水源池遺跡、岸和田市重の原遺跡、土生遺跡、貝塚市畠中遺跡、麻生中遺跡などがある。

飛鳥・白鳳・奈良・平安時代

この時代は仏教伝来と共に寺院造営のめまぐるしい時期で、古代豪族は氏寺の建立に勢力を注ぎ、朝廷でも宮都の造営に力を入れ、飛鳥地域に宮を築いていった。

和泉地方においても、奈良時代に入って和泉国府が置かれ、泉大津の浜は国府津（小津）として栄えた。東雲遺跡では国府と国府津を結ぶと思われる路沿に掘立柱建物跡10数棟を含む集落跡が発見されている。これらの掘立柱建物跡は奈良時代から鎌倉時代初期までの間に、何度も建て直されていったことが、建物の主軸方向が異なっていることや重複していることで判断できる[21]。

豊中遺跡においては平安時代後期に属する井戸が1基検出され、井戸内より「田井」「田井殿」と高台部内側あるいは体部外面に墨書された黒色土器や灰釉陶器・土鍋・土師器杯が出土している[22]。

白鳳時代創建の泉穴師神社、宝亀年中に創建されたと伝わる穴師薬師寺跡付近や豊中遺跡からは、平安時代末以降の瓦の出土があり、寺院またはそれに等しい規模の建物が建っていた可能性がある。また、穴師薬師寺跡から「穴師堂」銘瓦や宋銭が出土している。穴師薬師寺は宝亀年中に小津の浜に木像の薬師如来が流れつき、穴師村にお堂を建てて安置した。そして、平安時代中頃に薬師寺となり規模も拡大した[23]。穴師薬師寺・泉穴師神社を中心にして、集落が形成された可能性があり、また、豊中遺跡内に「大福寺」という小字名が残っており、記録的には何も残されていないが、豊中遺跡出土の平安時代末以降の瓦と結びつく可能性もあるため、今後の調査に期待するところである。また、遺物散布地として虫取遺跡がある。

和泉市においては、和泉国府が置かれていた。また、奈良時代の創建と思われる安楽寺があり、この寺は承和6年(839)に国分寺となる。松尾寺からも奈良時代の瓦が出土している。さらに、和泉寺、池田寺、坂本寺、信太寺もこの時代に属するものである。万町北遺跡からは、10世紀頃の掘立柱建物跡が発見されている[24]。

鎌倉・室町時代

泉大津市内においての中世は、平安時代同様問題点は多いが、東雲遺跡において鎌倉時代初期に至る可能性のある掘立柱建物跡が検出されている[25]。古池遺跡においても、鎌倉時代の倉庫跡や掘立柱建物跡が発見されている[26]。豊中遺跡においては、土釜(羽釜)を使用した羽釜枠井戸や曲物を使用した曲物枠井戸など、種々の形態の井戸が数多く確認されている[27]。また、中世遺構と共に瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質練鉢、瓦などの遺物も多数出土している[28]。穴田遺跡からは土釜井戸1基、板原遺跡からは鎌倉時代の掘立柱建物7棟、七ノ坪遺跡からは小溝群とピットが、それぞれ発見されている。遺物散布地としては、虫取遺跡、穴師遺跡、池上曽根遺跡、穴師神社遺跡がある。

和泉市和気遺跡は、大量の中世遺物を出土し、遺構としても今福地区から寺門地区に至る大規模な中世の住居跡遺跡である[29]。また、万町北遺跡では羽釜が出土している[30]。　(池田)

第３章　発掘調査報告

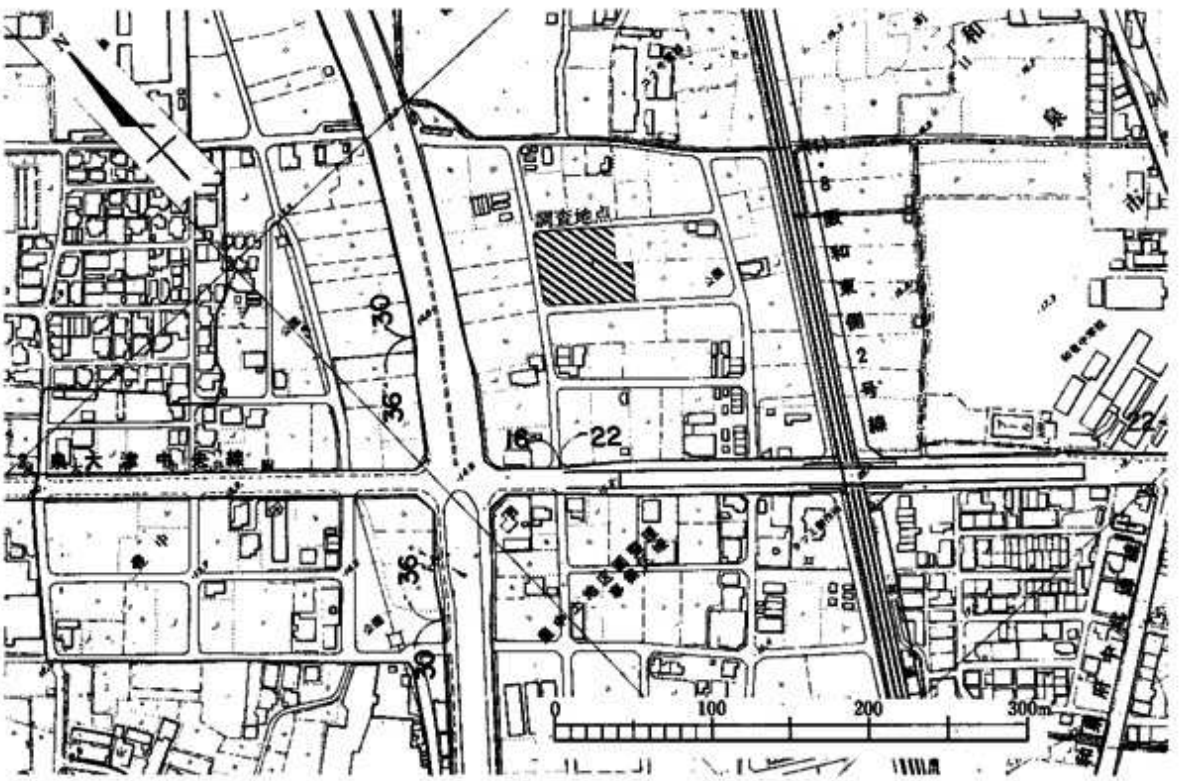
第１節　豊中遺跡　　北豊中町三丁目977-1，-2

１　調査に至る経過　（第３図）

泉大津市豊中の水田地帯では、土師器片や須恵器片が散布しており、道路工事の際にも須恵器壺が発見されるなど、遺跡の存在が予想されていたが、昭和40年代の後半まで本格的な発掘調査は行なわれていなかった。

そこで、市教育委員会では、第２阪和国道（現国道26号線）建設に先立ち、発掘調査を行ない、府教育委員会においても、同じく発掘調査が行なわれた。また、豊中土地区画整理事業に先立つ豊中・古池遺跡調査会の発掘調査なども契機となり、昭和50年以来、豊中遺跡内において、宅地開発に先立つ発掘調査を実施してきた。

以上の結果、縄文時代中期後半の土器の検出[1]や古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物・井戸・溝や



第３図　豊中遺跡調査地点図

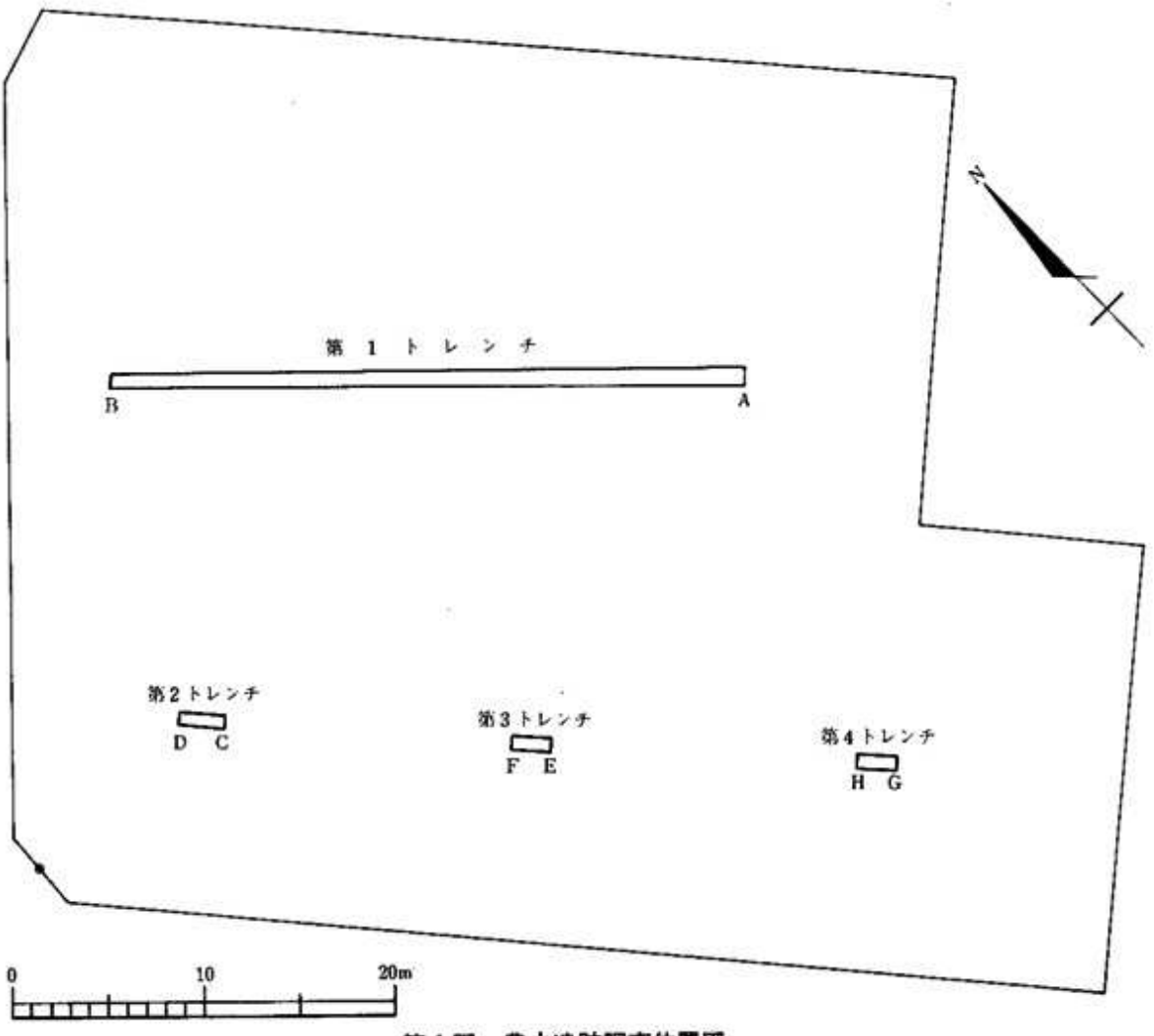
中世の溝など[32]と、それらに伴う遺物が発見され、複合遺跡であることが判明している。また、古墳時代の集落の構成も、遺跡内に平均的に見られるのではなく、数ヵ所に数棟単位で形成されていた[33]と思われる。さらに、中世の井戸も、水脈の場所にかたまって掘られていることが確認されている[34]。

今回、この遺跡内において宅地開発が計画され、これに先立ち予備調査を実施したものである。

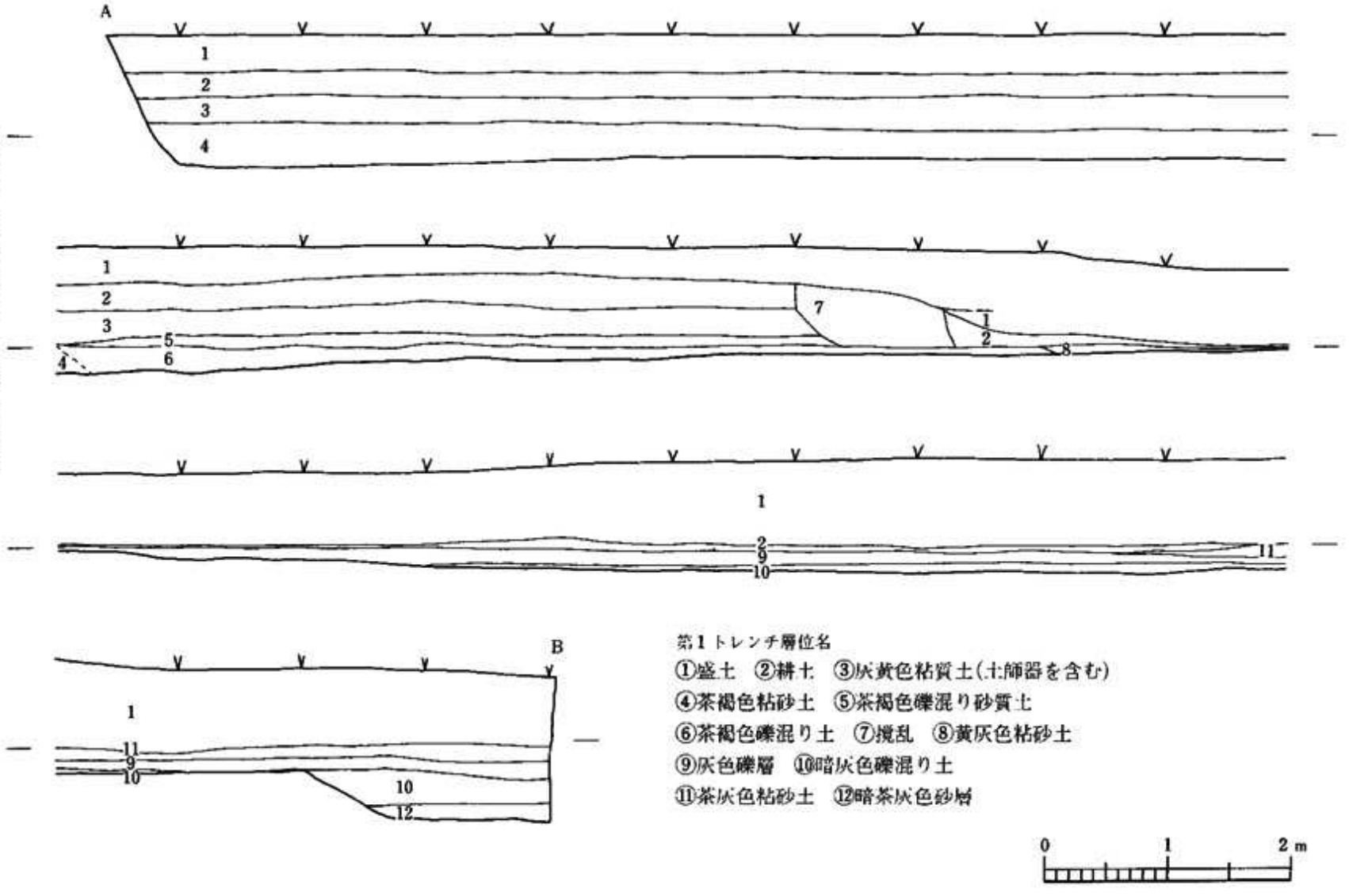
（坂口）

2　調査結果　（第4～6図）

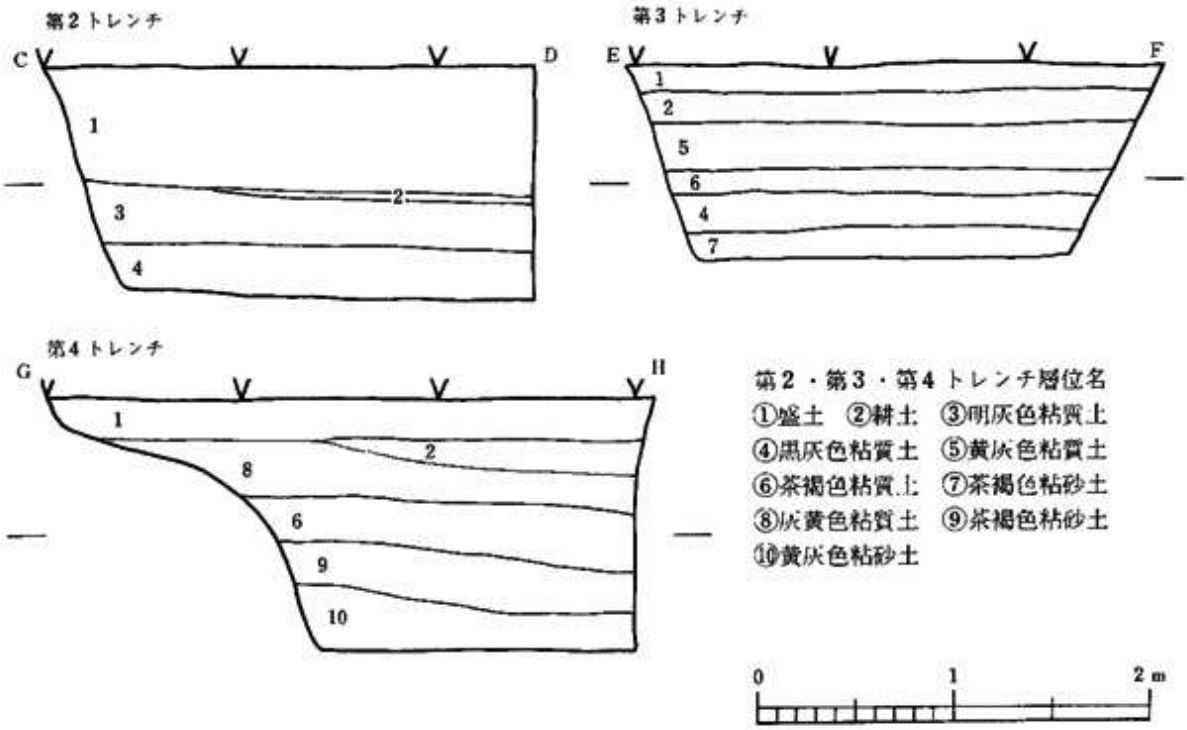
住宅建設に先立つ調査である。調査場所は50m ×47m ＋23m ×12m で、総面積は約2,626㎡ であ



第4図　豊中遺跡調査位置図



第5図　農中通跡第1トレンチ断面図



第6図　豊中遺跡第2・第3・第4トレンチ断面図

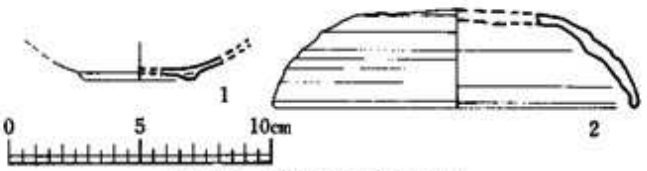
る。調査は初め中央地区に、北西から南東方向に幅1mで長さ約33mの第1トレンチをあけた。北西部の層序は、盛土約50cm、茶灰色粘砂土約10cm、黄灰色粘砂土約15cm、暗灰色礫混り土約20cmで暗茶灰色砂となる。中央部の層序は、盛土約20cm、耕土約20cm、灰黄色粘質土約20cm、茶褐色礫混り砂質土約10cmで茶褐色礫混り土となる。南東部の層序は、盛土約30cm、耕土約20cm、灰黄色粘質土約20cmで茶褐色粘砂土となる。この中央部と南東部の第3層灰黄色粘質土層から、古墳時代の土師器片・須恵器片と中世の瓦器椀片が検出できた。瓦器椀片（1）は高台の退化した低いものが貼り付けてあることから、白石太一郎編年[9]のⅢ－1型式ないしⅢ－2型式である。時期としては13世紀前中期から後期である。

第1トレンチの南西側で幅1mで長さ2～3mのトレンチを3本あけ、北西から第2・第3・第4トレンチとし断面観察を行なった。第2トレンチの層序は、盛土約60cm、耕土約4cm、明灰色粘質土約30cmで黒灰色粘質土となる。第3層の明灰色粘質土層から、須恵器杯蓋（2）の破片が出土している。器形は全体として丸味をおび、稜は退化して不鮮明であり、口縁端部は丸味を持つ。色調は灰色で、焼成は良好である。Ⅱ型式3段階ないし4段階である。[9]

第3トレンチの層序は、盛土約14cm、耕土約15cm、黄灰色粘質土約24cm、茶褐色粘質土約12cm黒灰色粘質土約20cmで茶褐色粘砂土となる。遺物の検出はなし。

第4トレンチの層序は、盛土約22cm、耕土約16cm、灰黄色粘質土16～28cm、茶褐色粘質土約24cm、茶褐色粘砂土約25cmで黄灰色粘砂土となる。第3層の灰黄色粘質土層から、須恵器の破片が出土している。

（楠山）

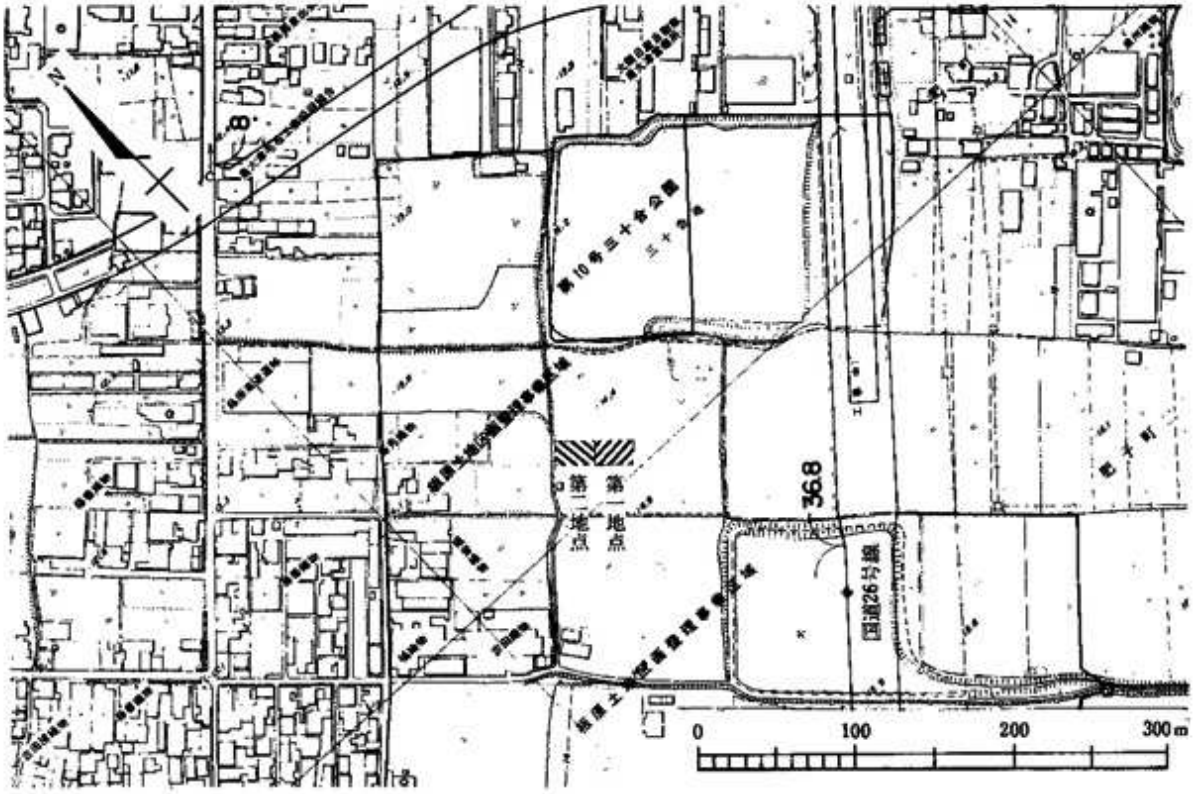


第7図　豊中遺跡出土遺物

第2節　板原遺跡

1　調査に至る経過　（第8図）

泉大津市板原の水田地帯には、須恵器・土師器・瓦器の各破片が散布しており、遺跡の存在が考えられていた。この地域に、第2阪和国道（現国道26号線）建設や土地区画整理事業が計画されたことによって、豊中・古池遺跡調査会は建設省や泉大津市の委託を受けて、昭和52年8月17日より10月29日の間、試掘調査を実施した。その結果、縄文土器や須恵器・瓦器・磁器・瓦や遺構が検出され、本格的な調査の必要性が報告された[15]。これに基づいて、府教育委員会は第2阪和



第8図　板原遺跡調査地点図

国道部分の発掘調査を、昭和54年6月25日より昭和55年3月31日までの間、実施した。[59]

この調査の結果、縄文時代後期の遺構として、ピットや自然流路とそれに伴なう土器、弥生土器、古墳時代の土壙・溝、奈良・平安時代の掘立柱建物2棟・溝、鎌倉時代の掘立柱建物7棟の他、溝や多数のピット、近世の瓦窯や瓦製土管列らが発見され、非常にユニークな、かつ、多種多様にわたる複合遺跡であることが窺われる。

今回、この遺跡内において個人住宅建設工事の計画により、「土木工事等による埋蔵文化財発掘届」が提出され、市教育委員会は工事着工に先立ち、発掘調査を実施したものである。

(坂口)

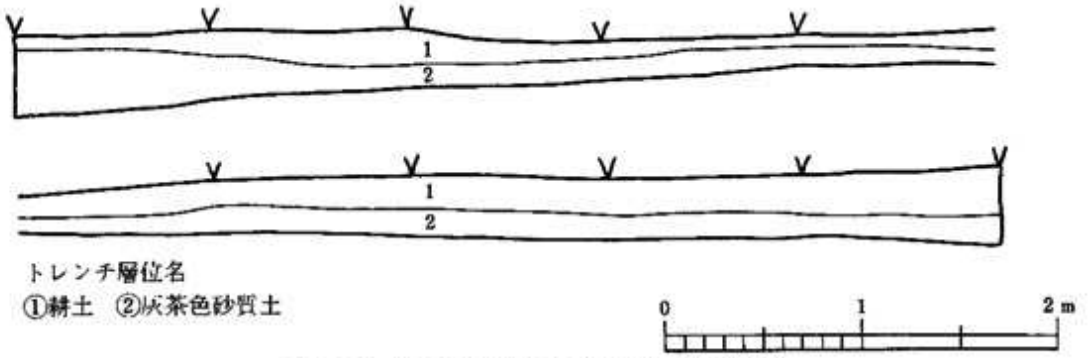
2　調査結果

第　1　地　点　　板原64－3

住宅建設に先立つ調査である。調査地点の南隅に、2m×2m50の調査域を設定して調査を行なった。住宅建設工事に伴なって耕土は除去されていたため、重機により床土と思われる暗灰色粘土を除去した。その後、人力により茶灰色粘土層を掘削した。約22cmで黄灰色粘質土となる。茶灰色粘土層より土師器片や須恵器杯片が出土した。暗灰色粘土層よりは奈良時代後期から平安時代中期にかけての、黒色土器の破片が多量に出土した。茶灰色粘土層は古墳時代の遺物包含で、この時期の堆積である。暗灰色粘土層は平安時代の遺物包含で、平安時代の中後期の堆積である。しかし2層共において遺構は検出されなかった。　　(楠山)

第　2　地　点　　板原64－2

第1地点の北西に隣接する地点である。約2m×10mの調査域を設定して調査を行なった。重機により耕土を除去し、人力により灰茶色砂質土層の掘削を行なった。削平の為か床土はなく、すぐに灰茶色砂質土となる。遺構・遺物共に検出はされなかった。　　(楠山)



第9図　板原遺跡第2地点トレンチ断面図

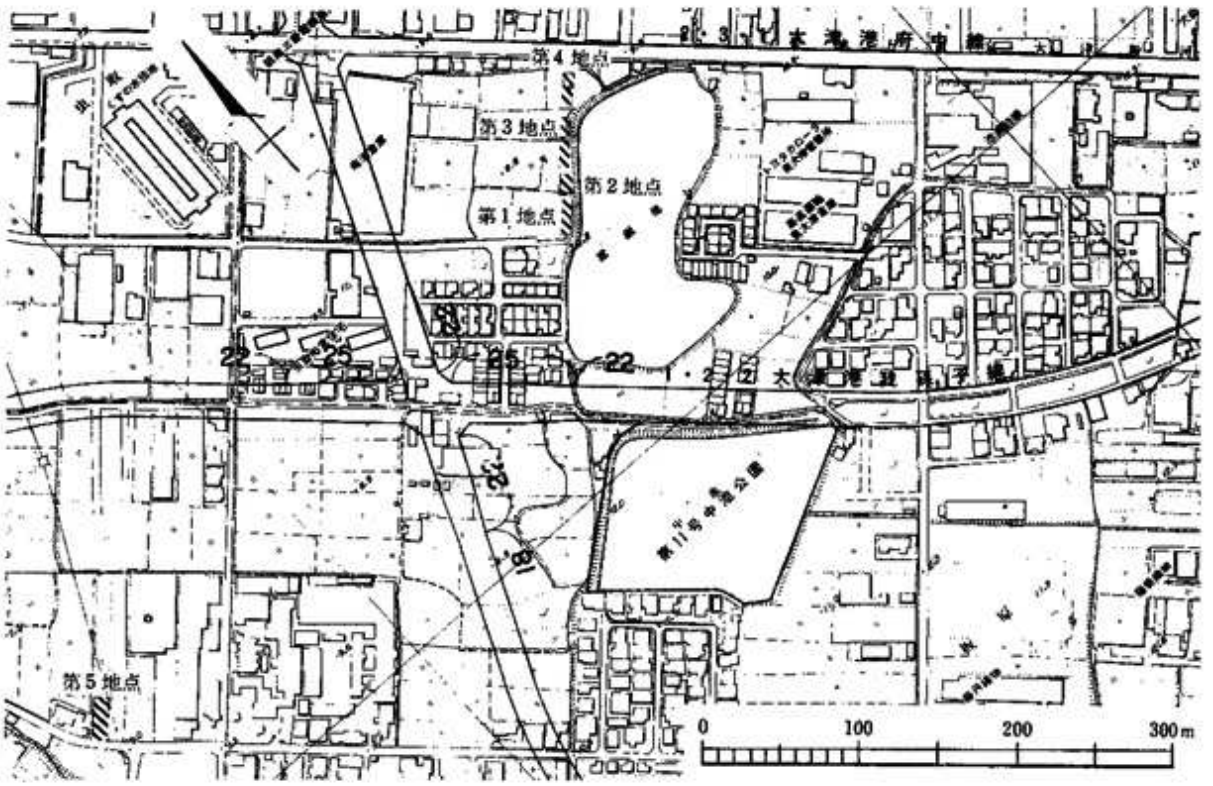
第３節　虫取遺跡

１　調査に至る経過　（第10図）

泉大津市虫取の市立南公民館を中心に半径800mの範囲内で、土師器片や須恵器片が散布しており、虫取遺跡として知られていた。昭和53年、宅地開発に先立つ発掘調査が、その費用を原因者負担で府教育委員会によってなされた。初めての本格的な調査によるメスが入れられたのである。

その結果、縄文晩期の土器片をはじめ、第Ⅰ様式新段階の土器を含む土壙、６世紀後半および10世紀後半の掘立柱建物等が発見され、弥生時代前期から集落の存在していたことが明らかになった。

その後、昭和54年に、この遺跡内に所在する諸瀬池が、小学校（現楠小学校）建設のため埋め立てられることになり、池内の堤防沿いに須恵器片等が散布していたので、市教育委員会により、池内の発掘調査を実施したのであるが、池底の改修等により残念ながら遺構・遺物は発見されなかった。それ以降も、機会ある毎にトレンチ調査を実施してきたが、目立った遺構の検出をみていない。



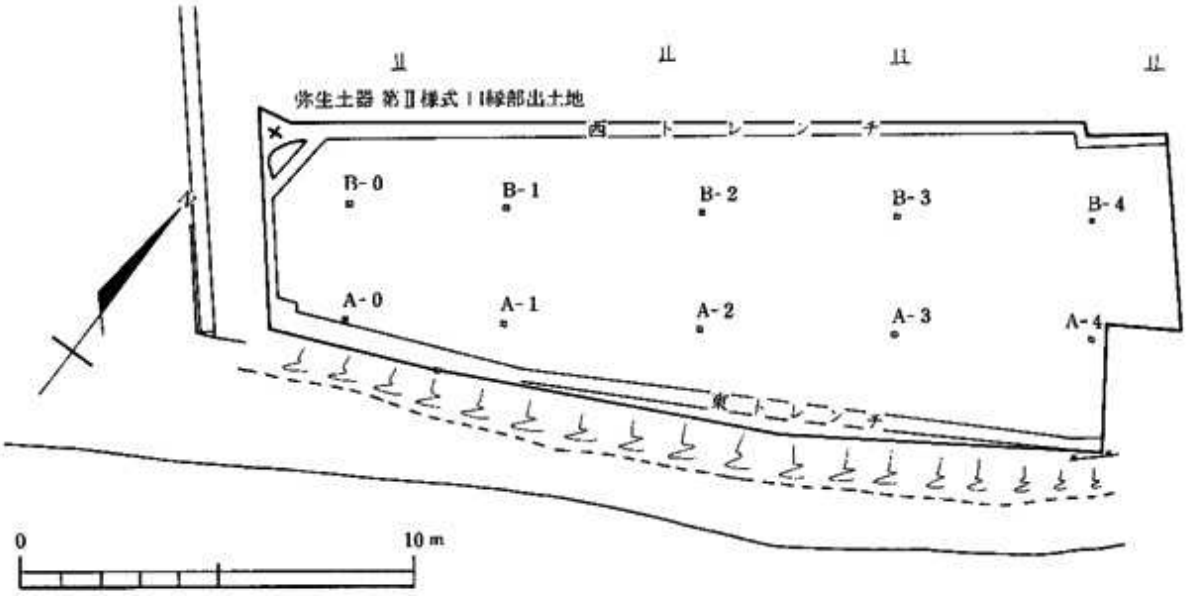
第10図　虫取遺跡調査地点図

今回、旧諸瀬池の西側堤防を一部くずしての開発（第１～第４地点）や水田の宅地化（第５地点）が計画され、それに先立つ発掘調査を実施したものである。　（坂口）

2　調査結果

第　1　地　点　　我係子221—4,5・222—2,3　（第11図）

調査は、重機で耕土を除去し、その後人力によって掘削を実施した。耕土の下層は砂層が大部分の位置を占めるが、南東側の方では茶褐色粘質土層が見られ、この層を人工的に切り込んで、溝４と落ち込み３が掘られていた。又、調査区の南西側では、暗茶色砂層中に弥生第Ⅱ様式の壷頸部より上部が倒立して出土した。



第11図　虫取遺跡第１地点位置図

遺　構（第12・13図）

溝

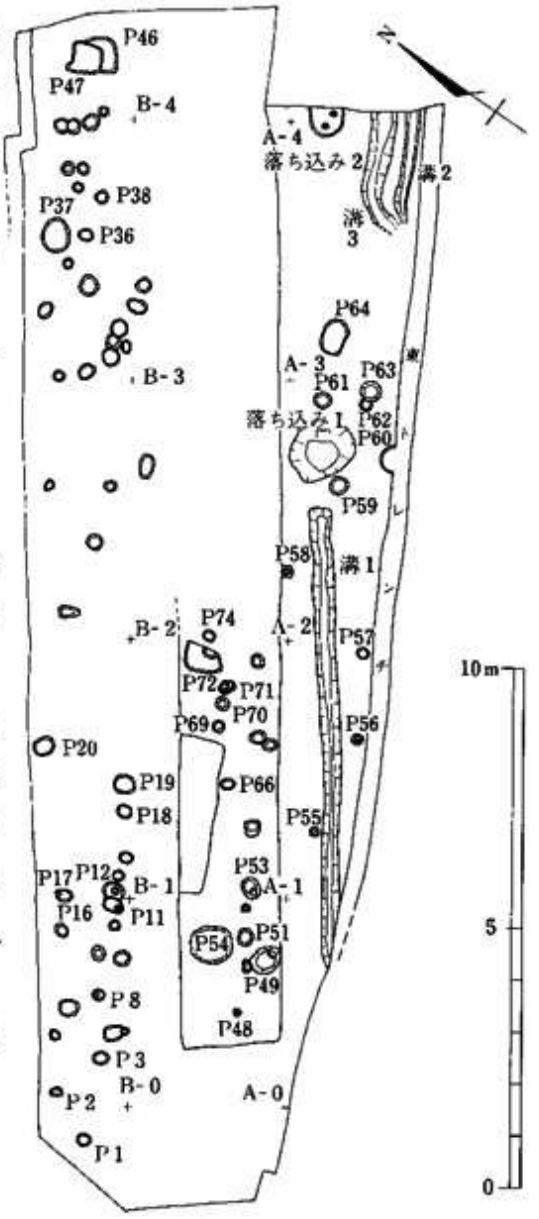
検出した溝は４条である。

溝１　幅約40cm、深さ約６～10cmで、現存長９ｍを確認した。流路は、北東と南西を結ぶ線の方向にあり、流水方向は不明である。落ち込みが埋没した後に形成された溝で、暗茶色粘質土が堆積しており、弥生土器・土師器・須恵器・土師質鍋把手（33）の各破片が出土している。

溝2　調査区の北東部に位置し、幅約25cm、深さ約6cmで、現存長2mを確認した。堆積土は暗灰色粘質土で、弥生土器・土師器の各破片が出土した。古墳時代の溝である。

溝3　溝2の西側をほぼ平行に流れる、幅約40cm、深さ5～10cmの規模の溝で、現存長は約2mを確認した。堆積土は暗灰色粘質土で、弥生土器・土師器の各破片が出土した。古墳時代に属する溝である。

溝4　旧諸瀬池の西側堤防の際で、幅約1～1m80、深さ約65cmの規模の溝が、北東と南東を結ぶ線の方向で、約11m検出された。流路方向は不明であるが、北東側で、弥生土器が溝底部に深く入り込んで堆積しており、若干深くなるので、北東方向へ向かって流れていたと考えられるが、堆積土は粘土層であるので、水はほとんど流れず溜っていたと思われる。この溝内で、弥生土器Ⅰ様式新段階からⅡ様式にかけての土器が多数出土し、この上部では、Ⅱ様式の壺棺と思われる思われるものを検出した。溝は、Ⅰ様式新段階からⅡ様式の時期にかけて存在していたものである。



第12図　虫取遺跡第1地点遺構図

落ち込み

検出した落ち込みは3個である。

落ち込み1　溝1の北東に位置し、直径1m30、深さ約26cm、底径約50cmの、ややくぼんだ円形をなす遺構である。堆積土は暗灰色粘質土で、弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトの破片が出土した。古墳時代に属するが、性格は不明である。

落ち込み2　調査区北東隅に位置し、調査区域外にまで及ぶ。ほぼ楕円形を呈し、短軸65cm、長軸60cm以上で、底面は凹凸をなし、深さは7～15cmである。暗灰色粘質土が堆積し、弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土した。古墳時代の遺構である。

落ち込み3　溝4の南西側で、溝4を切ってほぼ円形を呈している。規模は、調査区域外にま

でおよんでいるため不明であるが、直径6m以上と推定され、深さは最深部で約60cmとなり、2段に掘り込まれている。堆積土は暗灰色粘質土及び黒灰色粘質土で、土師器片・須恵器片が多量に含まれていた。この落ち込み3は、古墳時代に属するものである。

ピット

70数個のピットを検出し、3つのグループに分けられるが、いずれのグループにおいても建物を復元することはできなかった。古墳時代のピットである。

この発掘調査により、多くの成果があがった。まず、縄文土器が、包含層ではあるが出土した。付近の遺跡で縄文土器が出土しているのは、南東に約1km離れた板原遺跡で、中津式及び中津式併行の土器が発見されている[3]。今回の虫取遺跡でも、それらの時期に属するものであろう。

このほか、一括資料として、溝4より、弥生土器Ⅰ様式新段階からⅡ様式の遺物が得られた。これらの遺物は、多数のため、今回の報告までに整理を完了することはできなかったので、いずれ整理が出来次第報告したい。（坂口）

遺　物　（第15・15図）

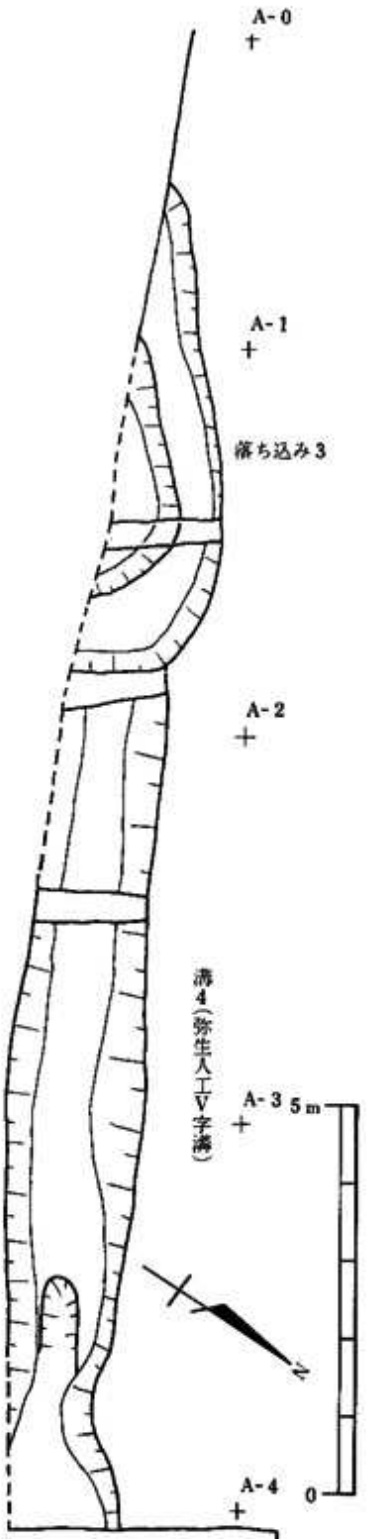
出土遺物は、縄文土器の破片、弥生土器の壺・甕、土製品、石製品、古墳時代の須恵器、奈良平安時代の土師質鍋の破片、黒色土器の破片である。時期としては、弥生第Ⅰ様式新段階から第Ⅲ・Ⅳ様式、古墳時代前中期、奈良時代後期から平安中期に至る遺物である。

なお、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所(層)、器種、特徴、焼成については、遺物観察表に示しておいた。

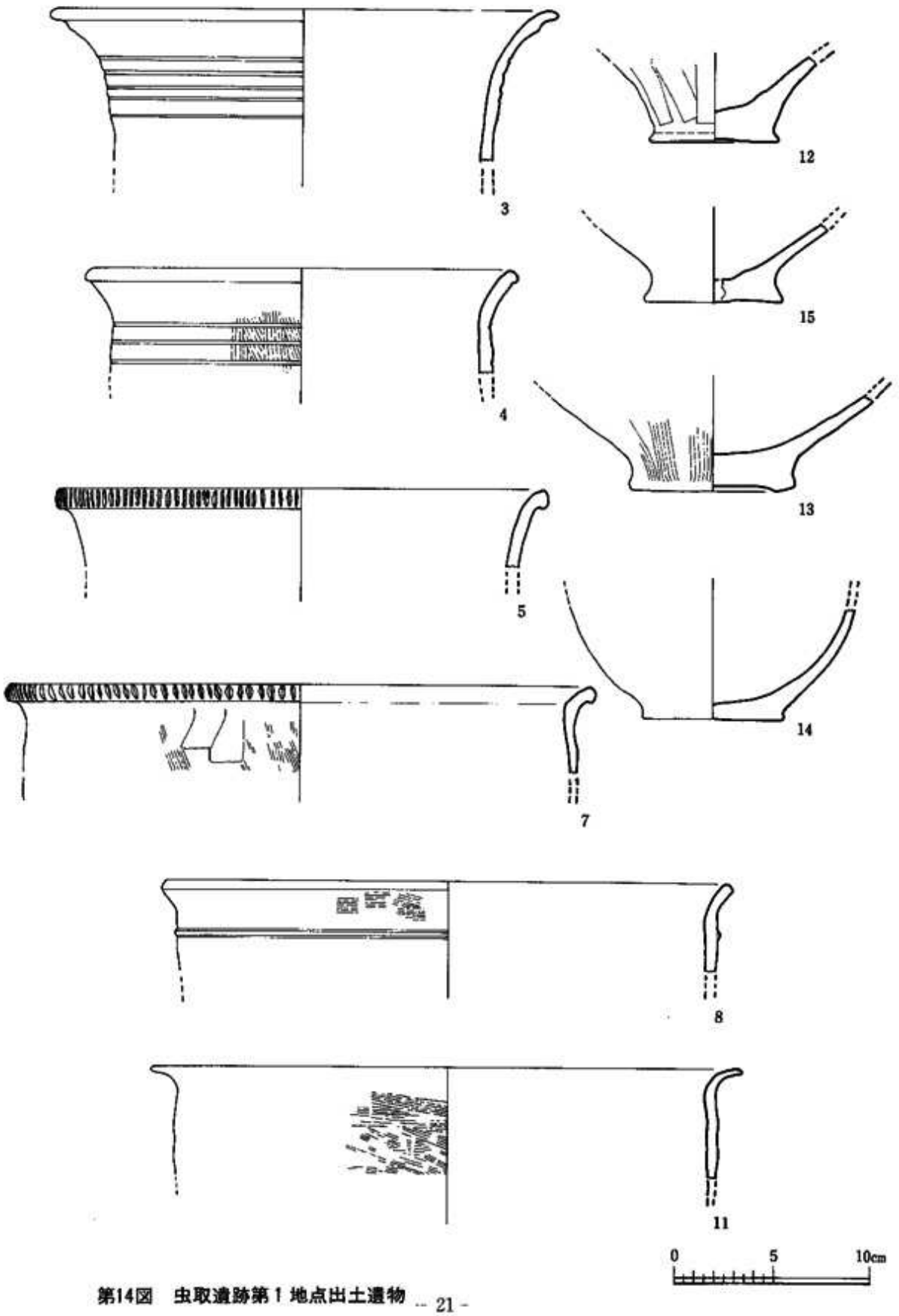
(1)弥生土器

広口壺（3）

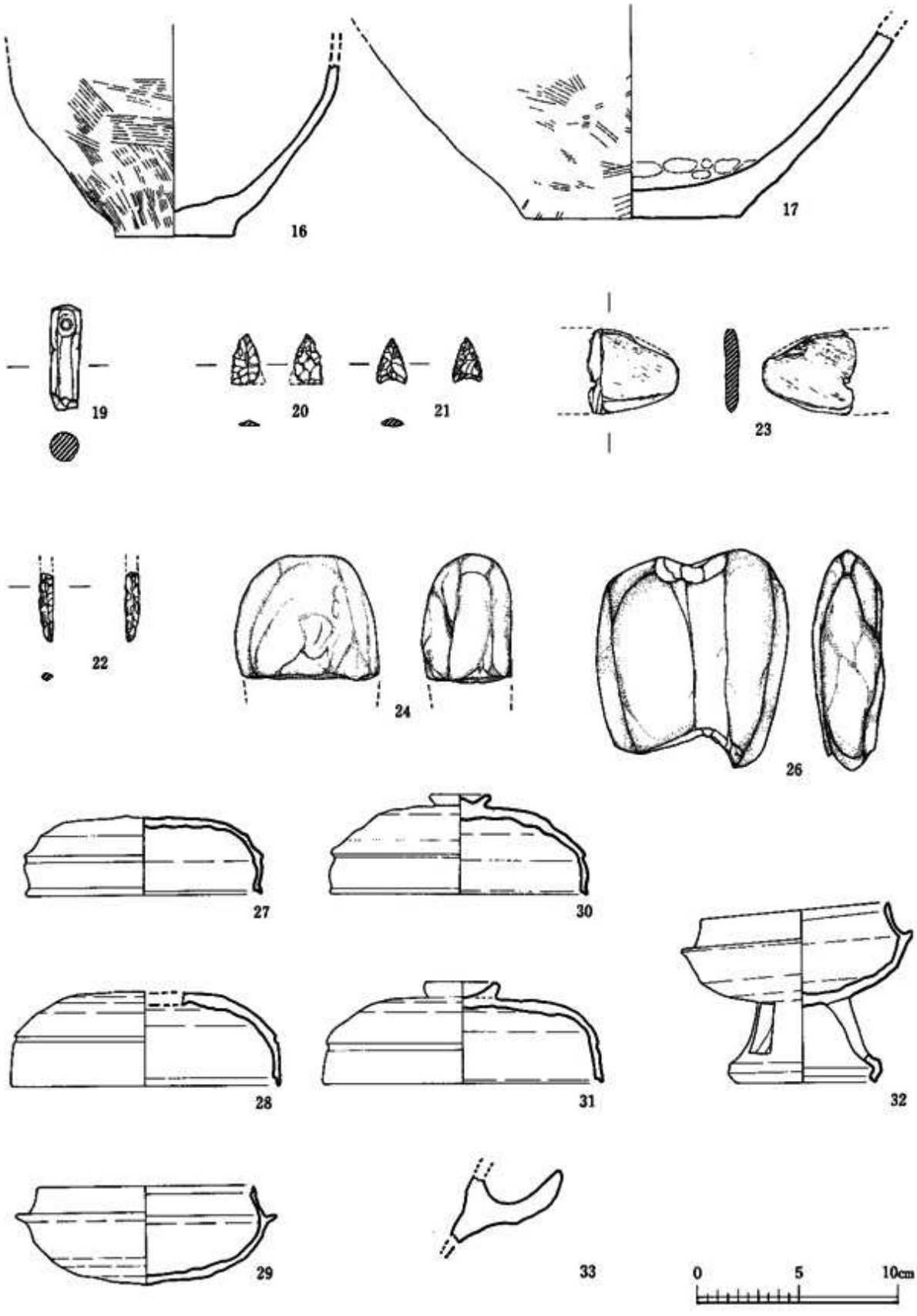
3は広口壺の口縁片である。頸部から口縁部にかけて幅が広



第13図　虫取遺跡第1地点溝4・落ち込み3遺構図



第14図　虫取遺跡第1地点出土遺物



第15図　虫取遺跡第1地点出土遺物

く、口縁は外反する。端部は外へ張り、丸く整えられている。外面頸部に約1～2㎜程度幅の沈線が5条めぐる。第Ⅰ様式新段階である。

甕（4～11）

4の口縁部はこころもち外反し、端部は丸く整えられ、外に張り出して丸くおさまる。第Ⅰ様式新段階である。5は口縁端部の外側に約1㎝の面を作り、約9㎜の長さの細い刻み目がある。胎土からみて和泉産と思われるが、大和型の可能性がある。第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式である。6は口縁部が外反し、面を持たずに丸く整えられている。外面調整はハケ目である。第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式である。7は口縁部の外側にやや丸味で約1㎝の面を作り、約9㎜の長さで幅約3㎜程度の刻み目がある。5に比べると口縁部外側の面も丸く、刻み目の幅も広い、大和型の平行期あるいは傾向の土器と思われる。胎土からみて和泉産と思われる。第Ⅰ様式である。8は口縁部が外反し、丸く整えられるがやや面を持つ。胴部に貼り付け突帯がある。第Ⅰ様式新段階である。9は外面胴部に、刻み目の貼り付け突帯が3条あり、突帯と突帯の間に櫛状のもので沈線がめぐる。第Ⅰ様式新段階である。10は外面胴部に、刻み目の貼り付け突帯が4条ある。第Ⅰ様式新段階である。11は口縁部が大きく外反し、端部は細く尖っている。第Ⅱ様式である。

底部（12～18）

12～18は弥生土器の底部片である。時期・器種については決めてには欠けるが、ススの付着などからわかるものについては、遺物観察表に示した。

18は底部中央に約1.5㎝の穿孔があり、甑器の底部片である。

(2)土製品（19）

土錘

丸棒状の棒状形土錘であり、一端は欠損していて不明ではあるが、残存する一端に径約6㎜の穿孔がある。体部は指押えとナデで整えている。体部径は1.5㎝である。

(3)石製品

石鏃（20・21）

20はサヌカイトの剝片を利用し、おおまかな二等辺三角形に外形を調整加工し、二辺の両側を細かく加工している。横最大1.4㎝・縦最大2.6㎝・最大厚0.2㎝である。平基無茎式である。

21もサヌカイトの剝片を利用し、おおまかな二等辺三角形に外形を調整加工し、二辺の両側を細かく加工している。横最大1.5㎝・縦最大2.3㎝・最大厚0.4㎝である。凹基無茎式である。

石錐（22）

22はサヌカイトの石錐の錐部片である。錐部は先細りに加工し、両辺の二面を鋭くするために細い調整加工を施している。

石庖丁（23）

扁平で横長の緑色片岩を石材として、長辺の一辺に刃部を研磨により薄く加工し、他方の長辺

を丸味の持つ背面としている。体部は全面に磨き加工を施している。

石斧（24・25）

24は楕円球を呈する、目の粗い和泉砂岩の自然石を素材とし、幅の広い二面の中央部に打ち込みによる窪みがみられる。基部のみが残存し、刃部は欠損しているが、太型蛤刃石斧と思われる。

25は石斧片である。目の細かい砂岩を素材とし、体部外面は奇麗に磨き加工が施されている。

石錘（26）

26は扁平で隅丸の長方体を呈する、目の粗い和泉砂岩の自然石を素材とし、長軸の両端部を打ち欠いている。縄状のものによって縛られていたために、擦られて痕が残ったのか、縄状のもので縛るために、はずれにくくするために人為的に窪みを作ったのかわからないが、幅約1.5㎝の窪みが体部の両面中央の長軸に残る。漁網の沈子として使用されたと思われる。

岬町淡輪遺跡の昭和55年度報告[39]においても、50点以上の石錘が出土しており、小形15ｇ、中形120g、大形400gを平均的な重さとして、３種類に分類している。また、出土量から、用途によって使い分けがなされていたと推測している。

(4)須恵器

杯蓋（27・28）

27は天井部が比較的平らかで、天井部と口縁部との境に稜がみられる。口縁部は内傾するが端部は外反し、凹面をなしている。第Ⅰ型式３段階である。

28は天井部がやや平担で、体部はやや丸味を帯びており、口縁部との境に、稜というよりは、沈線を一条めぐらす事によって、稜を浮かびあがらせている。口縁部は外反せず、口縁端部は凹面をなしている。第Ⅱ型式２段階である。

杯身（29）

たちあがりは比較的に高く、内傾しており、口縁端部は内傾する明瞭な段を有し、凹面をなしている。受部は短かく、上外方へのびている。底部は丸く、回転ヘラ削りによる調整がおこなわれており、ヘラ先きで幾本も線が刻まれている。第Ⅰ型式５段階である。

高杯蓋（30・31）

30の口縁部はやや内傾し、天井部との境にやや明瞭な段がみとめられ、天井部はやや丸味を持つ。つまみは扁平な形であるが、中央部がこころもち膨らんでいる。第Ⅰ型式５段階である。

31の口縁部はやや外反し、天井部との境に、稜というよりは、沈線を一条めぐらすことによって、稜を浮かびあがらせている。天井部はやや平担である。口縁端部は凹面をなしている。第Ⅱ型式１段階である。

高杯（32）

杯部のたちあがりは内傾しており、口縁端部はこころもち外反し、平面をなしている。受部は

短かく、上外方へのびている。脚部はハの字形にゆるやかに外反して、裾部で大きく段をなし内傾し、内側に凹線がみられる。脚部高の低いもので外踏んばりのしっかりしたものである。外面の一部に櫛状道具を用いた回転ナデ調整がみられる。第Ⅰ型式4段階である。

(5)土師質鍋の把手片 (33)

33は土師質の把手片で、比較的に薄く指押えにより形を作っている。把手片の下面にススが付着している。鍋の把手片と思われる。

(6)補足

本地点の出土遺物は、弥生時代前期（第Ⅰ様式新段階）から中期初め（第Ⅱ様式）の土器と、それに伴なう石製品、古墳時代前期の須恵器であるが、今回報告出来なかった遺物に、縄文時代晩期の滋賀里Ⅳ式[41]に属する時期と紀伊地域産の出土がある。また、濠4（弥生人工V字溝）が検出されており、弥生時代前期から中期の土器が多量に出土している。

なお、石製品石錘26についてではあるが、縄文時代の遺物と考えていいのか、あるいは、弥生第Ⅰ様式に伴なう時期なのか、不明点がある。また、漁網の沈子として使用されていると記述しておいたが、出土が1点のみであり、他の目的に使用された可能性もある。錘の用途について、まだ疑問点が残っている。

また、弥生土器甕5や7の口縁部にみられる、外側に約1cmの幅の面を持つ土器における地域性（虫取遺跡における第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の時期のみにみられる特徴なのか）についても、問題点を残す。

（楠山）

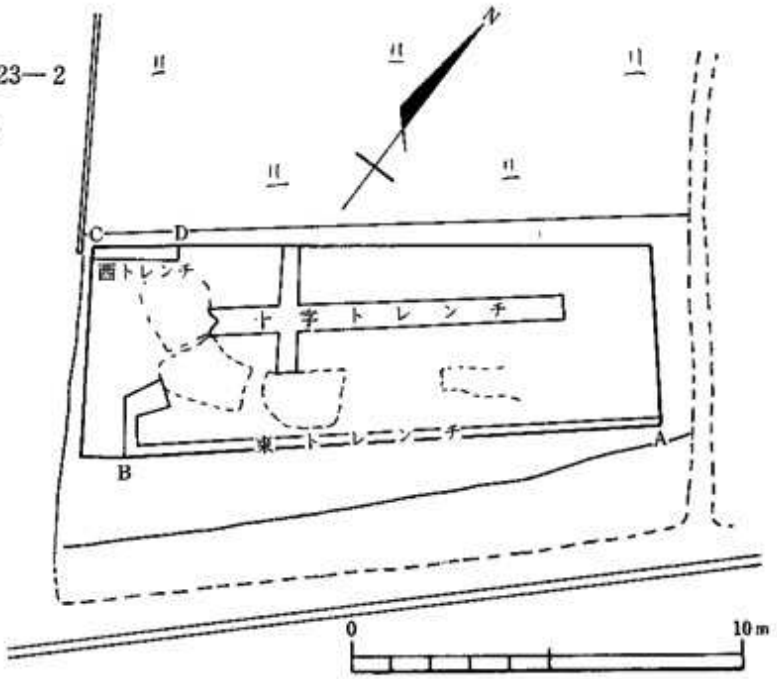
第 2 地 点

我孫子223—2

遺 構 (16・17図)

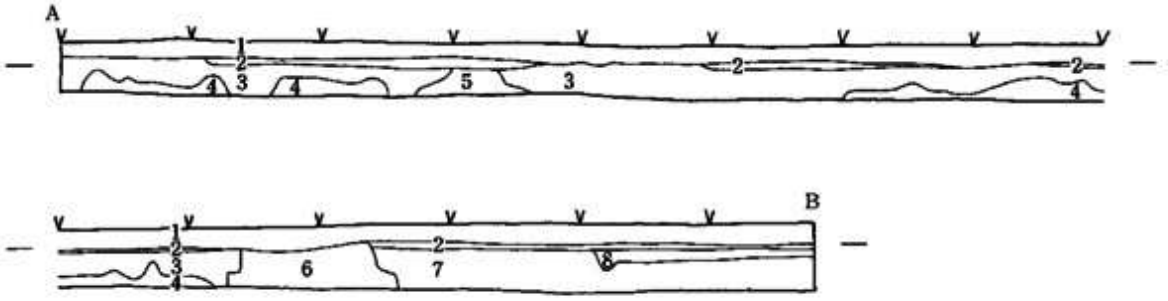
重機で、耕土を、長さ15m、幅5mの規模で除去し、その後、人力で床土を掘削し、暗茶色粘質土及び黄灰色粘質土の面を調査した。

その結果、須恵器高杯40や土師器38を含む土師器群を検出し、また、黄色の強い粘質土の部分も4ヵ所で見られた。更に、東壁際に、幅20cm、深さ50cmの規模の

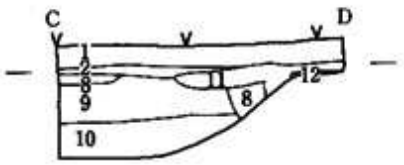


第16図 虫取遺跡第2地点位置図

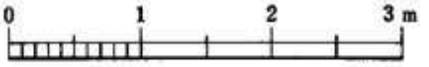
東トレンチ



西トレンチ



東トレンチおよび西トレンチ層位名
①耕土　②床土　③暗茶色粘質土(土師器・須恵器を含む)
④黄色粘土⑤黄色粘砂土⑥暗灰色粘質土(土師器・須恵器を含む)
⑦茶灰色粘砂土(土師器・須恵器を含む)　⑧黄灰色粘質土
⑨黒灰色粘砂土(遺物を含む)　⑩黒灰色砂質土
⑪暗灰色粘質土　⑫黄色粘質土



第17図　虫取遺跡第2地点東トレンチおよび西トレンチ断面図

トレンチを掘削し、断面観察を実施した結果、第17図の如くであった。それぞれの粘質土及び粘砂土には、土師器・須恵器片が含まれていたが、二次堆積によるものと考えられる。また、中央部において、幅60cm、長さ9mと3mのトンンチを、十字形に、黄色粘土層が現われるまで掘削したところ、平均の深さは20cmで表面が凹凸の状態になった。この掘削土（暗茶色粘質）から、後期の縄文土器片や中期弥生土器・須恵器のほか、太型蛤刃石斧片（37）などが出土した。

以上のトレンチのほかに、南西隅にもトレンチを掘削し、その断面は第17図に示す。（坂口）

遺　物　（第18図）

出土遺物は、石製品、土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、土製品である。

なお、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、器種、特徴、焼成については、遺物観察表に示しておいた。

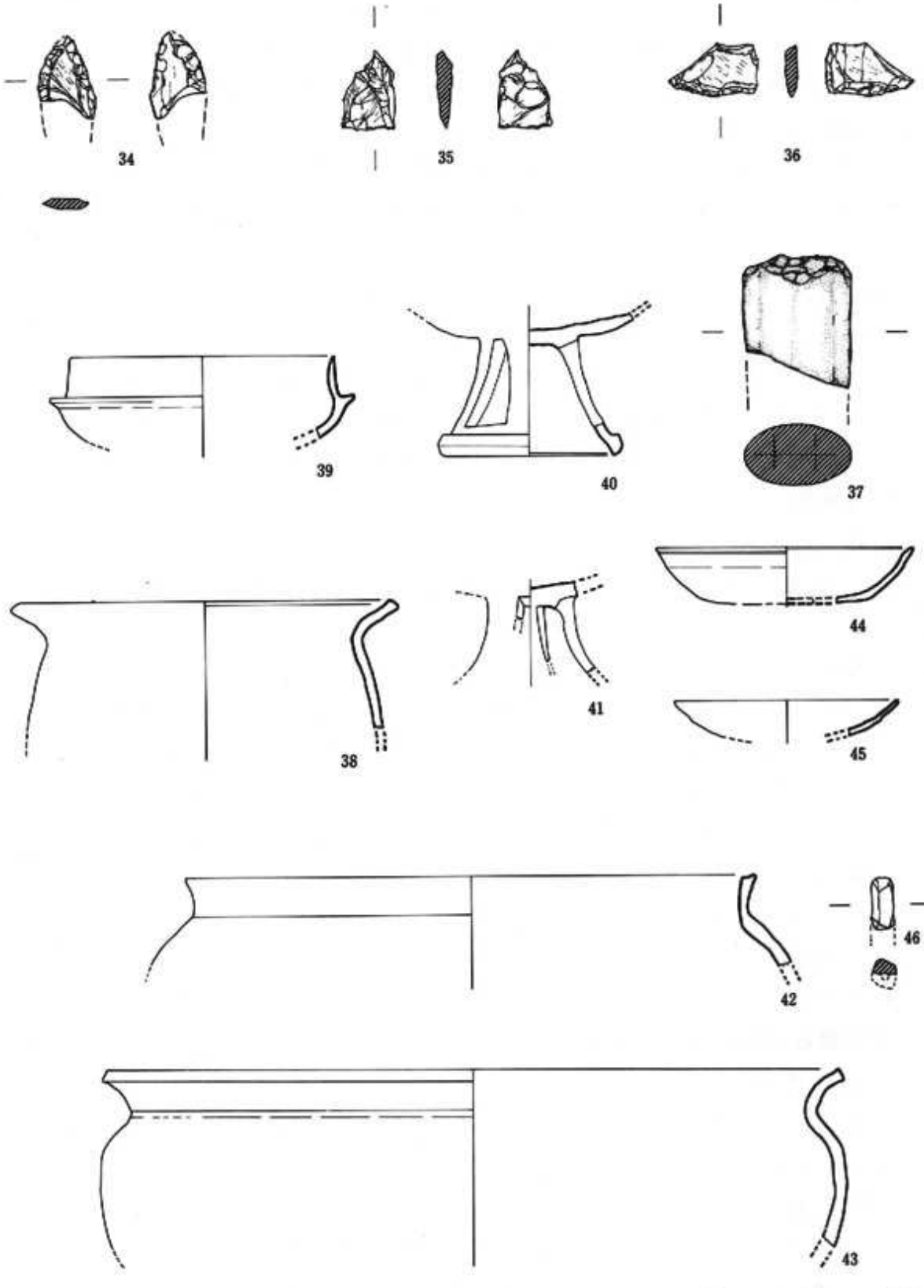
(1)石製品

石鏃（34）

残存長は横2.7cm×縦4.3cmの大型の石鏃であるが、基部が欠損しているために形は不明である。刃部は、二辺の両側を細かく調整加工を施している。石材はサヌカイトである。

不定形刃器（35・36）

35は剥離面を両面に残し、一辺を細かく調整加工して直線的な刃部をつくっている。刃部の長



第18図　虫取遺跡第２地点出土遺物

さは約2.5㎝である。36も剥離面を両面に残し、一辺の両面を細かく調整加工して直線的な刃部をつくっている。刃部の長さは約4.2㎝である。35・36共に石材はサヌカイトである。

石斧（37）

37は目の細かい砂岩を石材として、外面全体を磨き加工してつくられた太型蛤刃石斧である。基端部に、打撃による破損部分がみとめられ、打撃痕が著しく残る。敲石として転用されたものと思われる。

(2)土師器

甕（38）

38の頸部は、「く」の字状に外反し、口縁部の立ちあがりは大きく反り返る。口縁端部はやや面を持ち、上方向につまみあげられ丸く膨らんでいる。外面調整は、櫛描き目とも思われる細かいタテタタキ目である。上田町Ⅱ式あるいはその平行の時期に属するものである。

(3)須恵器

杯（39）

たちあがり高が約2㎝で、やや内側に傾むき、受部は外方向に平らに延びる。口径がやや大型化する時期である。第Ⅱ型式1段階ないし2段階である。

高杯（40・41）

40は高杯の脚部である。脚部はハの字形に外反し、端部で外方向にこころもち曲げられて膨らんでいるが、内側にはこころもち窪みがみられるものの、段はほとんど消えている。スカシ窓は長方形で三方向に不均整である。第Ⅰ型式5段階である。41は脚部の破片であるが、長方形の四方スカシ窓が確認できた。

甕（42・43）

42は口縁部がやや垂直に立ち、端面は上方向であり、凹状がみられる。第Ⅳ型式4段階である。

43の口縁部は、「く」の字状に大きく外反し、端面は外上方向であり、凹状はみられない。第Ⅴ型式である。

(4)土師質・黒色土器・土製品

土師質杯（44）

口縁部がこころもち外反し、端部は丸く整えられているが、外側に沈線が一条めぐる。平安時代前中期頃の遺物である。

黒色土器（45）

45は、内面が炭素の吸着により黒色化した黒色土器A類に分類される皿である。A類は、田中琢氏の[12]分類によると、奈良時代後期から平安時代前中期にかけてである。

土製品（46）

円柱形土錘の破片である。体部外面はヘラナデ調整のうえ、指押えで成形している。器種は厚いが、円孔は細いものである。（楠山）

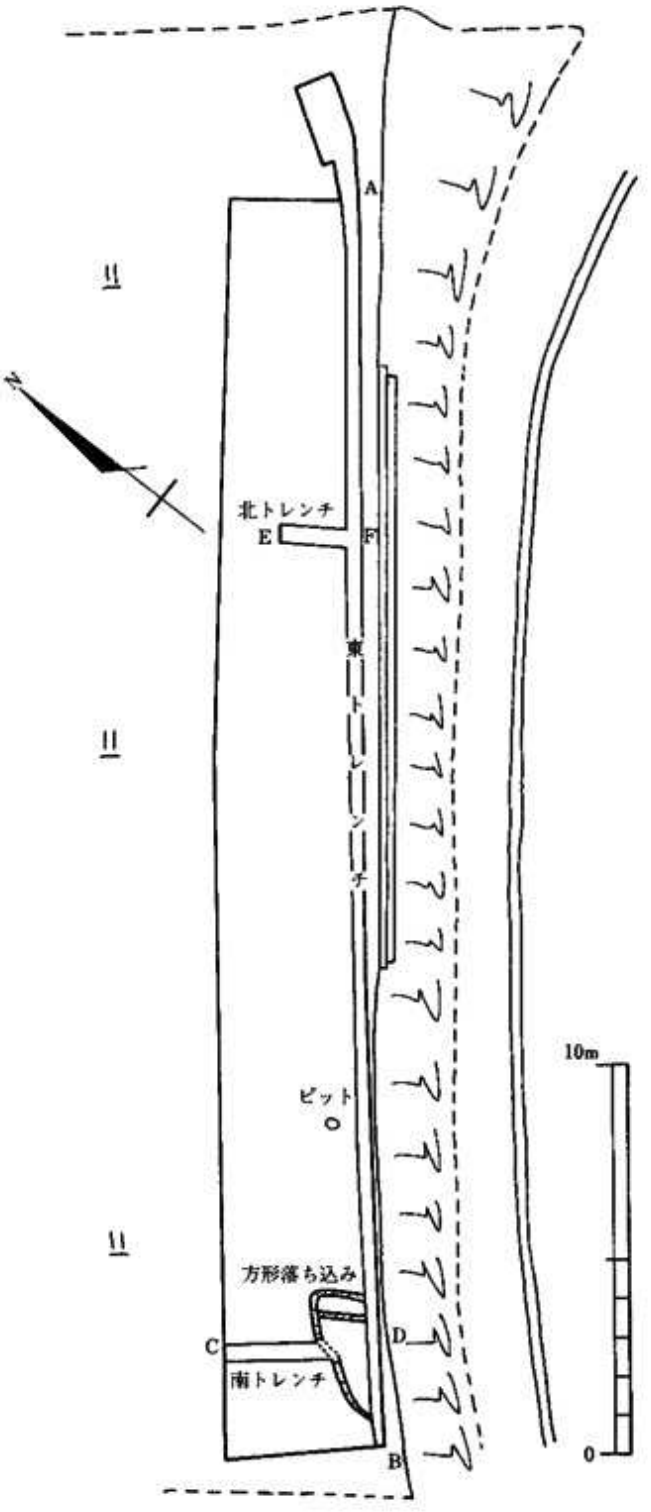
第 3 地 点　我孫子416—2

遺 構（第19～21図）

重機で、耕土を、32.5m×3.5mの規模で除去し、その後、人力で掘削を行なった。北側より中央部分位までは床土が見られ、その下層の黄灰色粘質土までを、また、残り南側部分は、耕土の下層が黄色粘砂土及び暗茶色粘質土となっており、それらの上面までを、それぞれ掘削を実施したものである。

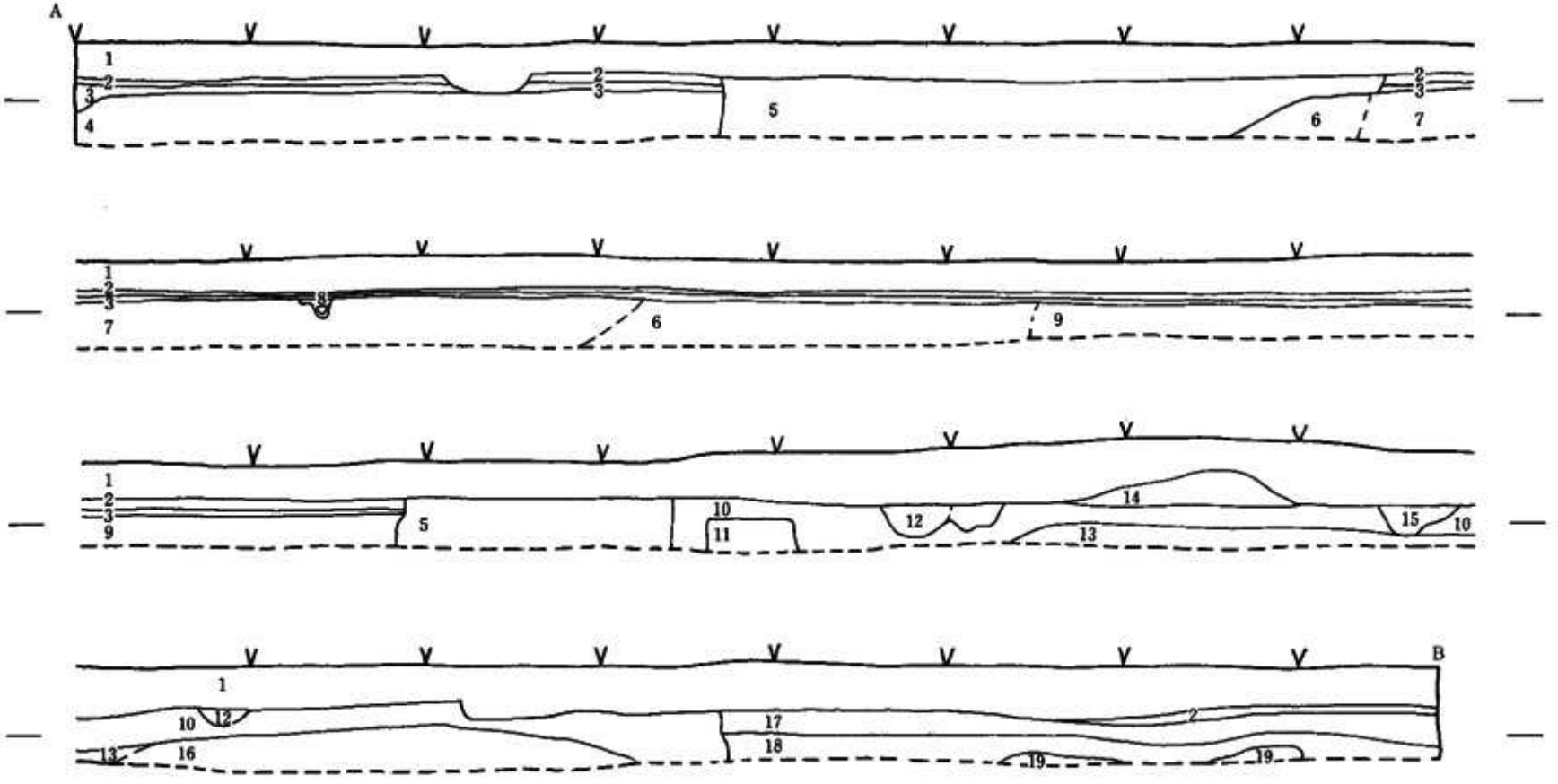
この結果、南部分で、黄色粘土層を切って、直径40cm、深さ20cmの規模のピットが1個、東壁断面に、直径30～40cm、深さ10～20cmの規模のピットが4個、確認できた。堆土は暗茶色粘質土で、土師器の小破片が出土した。さらに南側では、長軸3m20、確認した幅1m70、深さ推定30m以上の落ち込み状の遺構が見られた。

以上のほかには、遺構らしきものが検出されなかったので、東壁沿いに、幅50cm、深さが地表より50～60cmの規模のトレンチと、それに直角の方向で、

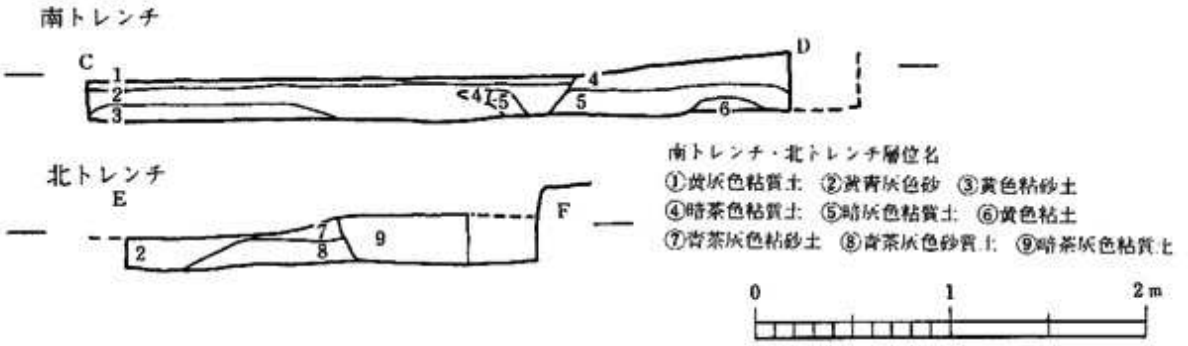


第19図　虫取遺跡第3地点位置図

東トレンチ



東トレンチ層位名
①耕土　②床土　③黄灰色粘質土　④灰茶色粘質土(須恵器を含む)　⑤撹乱(黄灰色礫混り粘質土)
⑥灰茶色粘砂土　⑦暗茶灰色粘質土(須恵器、土師器を含む)　⑧黄灰色粘質土
⑨暗茶灰色粘砂土(須恵器、土師器を含む)　⑩黄色粘砂土　⑪灰茶色砂質土
⑫暗茶灰色粘質土(土師器を含む)　⑬淡黄灰色砂質土　⑭黄色粘質土　⑮暗茶灰色粘質土
⑯茶灰色砂質土　⑰暗茶色粘質土(須恵器を含む)　⑱暗灰色粘質土(須恵器を含む)　⑲黄色粘土



第21図　虫取遺跡第3地点南トレンチ・北トレンチ断面図

北側と南側にトレンチを1本ずつ掘削し、断面観察を実施した。（第21図）粘質土及び粘砂土に須恵器・土師器片が含まれていたが、二次堆積によるものであると考えられる。

以上をもって調査を終了した。　（坂口）

遺　物　（第22図）

出土遺物は、弥生土器、土製品、石製品、須恵器、土師質土器である。

なお、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、器種、特徴、焼成については遺物観察表に示しておいた。

(1)弥生土器（47）

弥生土器の破片である。刻み目のある貼り付け突帯を有する、第Ⅰ様式新段階の時期である。

(2)土製品

土師質土錘（48～50）

48は管形土錘である。器壁は薄く器表面はナデ調整により整えている。

49・50は棒状形土錘と呼ばれるもので、49は摩滅のため器表面の調整および体部の形は不明ではあるが、残存する一端に径約5㎜の穿孔がある。体部は指押えとナデで整えている。体部径は約1.2cmである。

(3)石製品

石鏃（51・52）

51はサヌカイトの剥片を利用し、おおまかな二等辺三角形に外形を調整加工し、二辺の両側を細かく加工している。横最大1.6cm・縦最大2.8cm・最大厚0.7cmである。凸基無茎式である。52は石鏃に分類されるものと思われるが、石錐の可能性もある。全体の形状が棒状を呈するもので、全面に丁寧に剥離加工が施され、自然面および大剥離面を残さないものである。横最大1.1cm・縦

最大4.2cm・最大厚0.7cmである。『池上遺跡・第3分冊の1・石器編』大阪府教育委員会。に石錐に分類されているものに、よく似たものがある。

石槍（53）

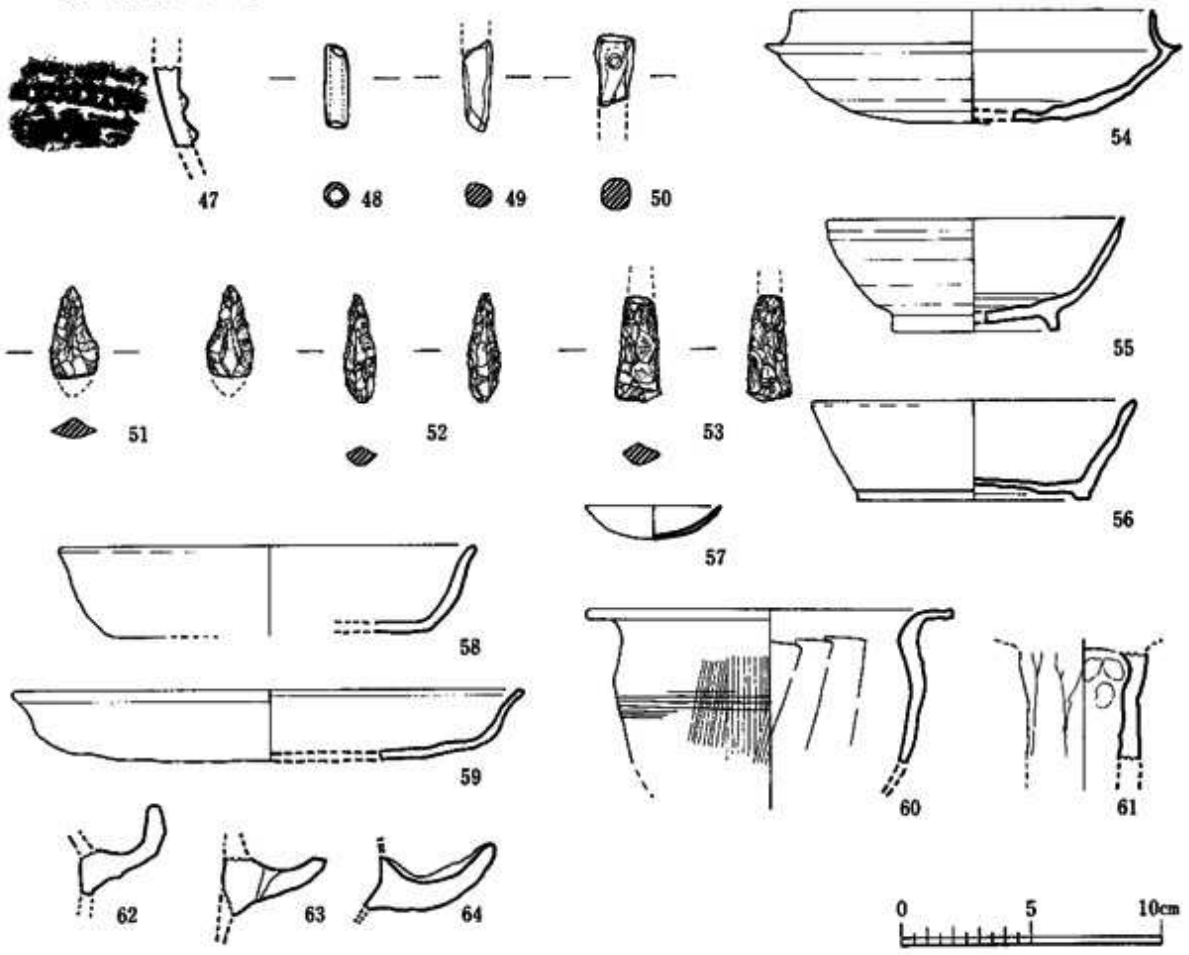
形状は、石鏃52の大型タイプである。全体の形状が棒状を呈し、大剥離面を2.3残すが、全面に丁寧に剥離加工が施されている。横最大が1.8cmで最大厚が0.8cmである。石鏃52同様に石錐の可能性がある。

(4)須恵器

杯身（54～56）

54は口径が広く、たちあがりは比較的に短かく内傾し、端部は丸く整えられている。底部はやや平らで、受部は外方向に伸びている。第Ⅱ型式3段階である。

55はゆるやかに外反する口縁部で、直立気味でしっかりしたハの字形の高台を伴なう。第Ⅳ型式1段階である。



第22図　虫取遺跡第3地点出土遺物

56はゆるやかに外方向に直立する口縁部で、底部端部にほぼ直立する形で、小さく貼り付けられている。第Ⅳ型式4段階である。

(5)その他の遺物

土師質小皿（57）

口径5.2cm、器高1.3cmの小皿である。器壁は薄く、口縁部はやや鋭く尖っている。底部はやや丸味を持つ。

土師器杯（58）

口縁部がゆるやかに外方向に直立し、口縁端部でこころもち外反し、端部は丸く整えられ、底部は平らである。奈良時代後半から平安時代に至る時代に属するものである。

土師質盤（59）

口縁部がゆるやかに外反しながらたちあがり、端部において大きく外反し、丸く整えられている。底部は指圧痕を残し、凹凸の面を残す。

土師質甕（60）

口径13.8cmの小型の甕である。口縁部が大きく「く」の字状に外反し、端部が上方向につまみあげられ、丸く整えられている。外面調整は全体にタテハケ目で、一部に横方向に櫛状痕が残る。

土師質高盤（61）

高盤の脚部片である。[43] 脚部の筒状部外面を縦方向に大きくヘラで削って、面取りをしている。粘土紐をまきあげて、指押しにより筒状部を成形するもので、接合部分内側に指圧痕が残る。8世紀から9世紀に至るものである。

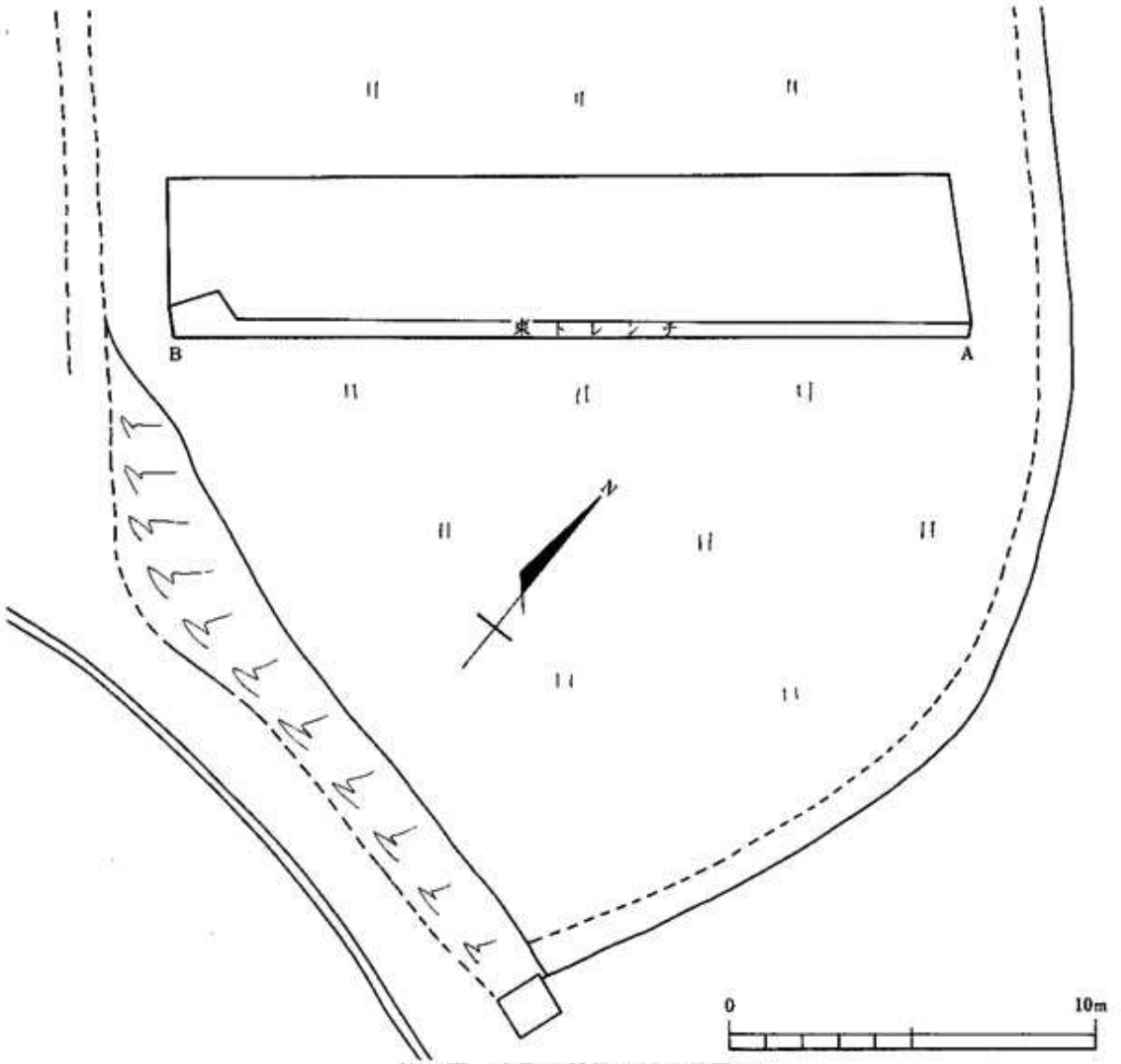
（楠山）

第 4 地 点　我孫子417—2

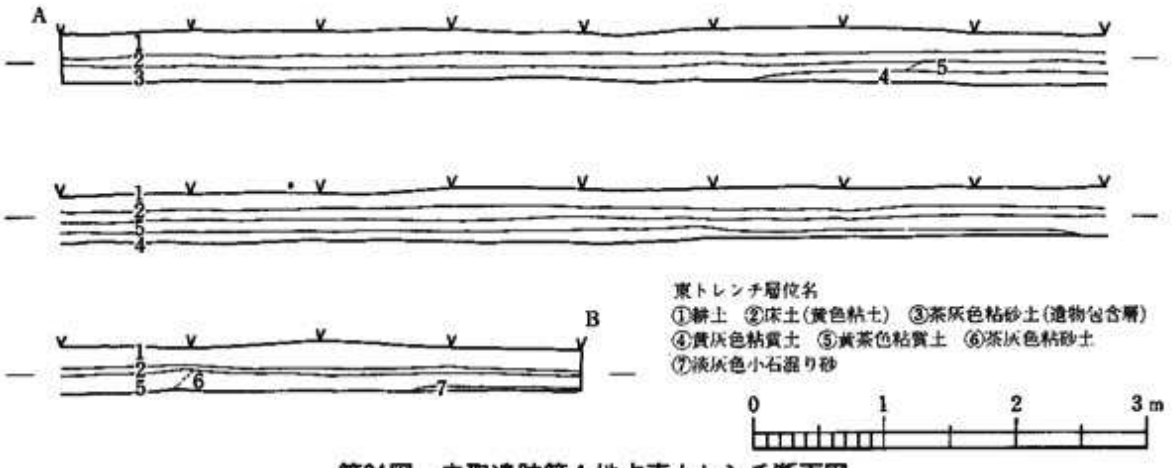
遺 構　（第23・24図）

耕土を、幅約4.5m、長さ約22mの規模で、重機により除去し、その後、床土にあたる黄灰色粘土層を人力で掘削除去した。この粘土層から石鏃（65）が1点検出された。更に床土下層上面で遺構の検出に努めたのであるが、発見するにいたらなかった。よって東側に幅40cm、深さ地表より約40cm、長さ20cmの規模のトレンチを人力で掘削し、断面観察を実施した。

その結果、床土の下層は北側で茶灰色粘砂土層、中央部で黄茶灰色粘質土層及び黄灰色粘質土層、南側で黄灰色粘砂土層になり、その下層に小石混り淡灰色砂層が見られ、床土の下層には、中世遺物（68）が包含されていた。しかし、今までの付近の調査結果から、以上の層の下には、



第23図　虫取遺跡第4地点位置図



第24図　虫取遺跡第4地点東トレンチ断面図

遺構は存在しないものと判断して、調査を終了した。（坂口）

遺　物　（第25図）

出土遺物は、石鏃、陶磁器、瓦質土器である。

なお、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、器種、特徴、焼成については、遺物観察表に示しておいた。

石鏃（65）

サヌカイト片を利用し、おおまかな二等辺三角形に外形を調整加工し、二辺の両側を細かく加工している。横最大1.7cm・縦最大2.4cm・最大厚0.4cmである。凹基無茎式である。

青白磁鉢（66）

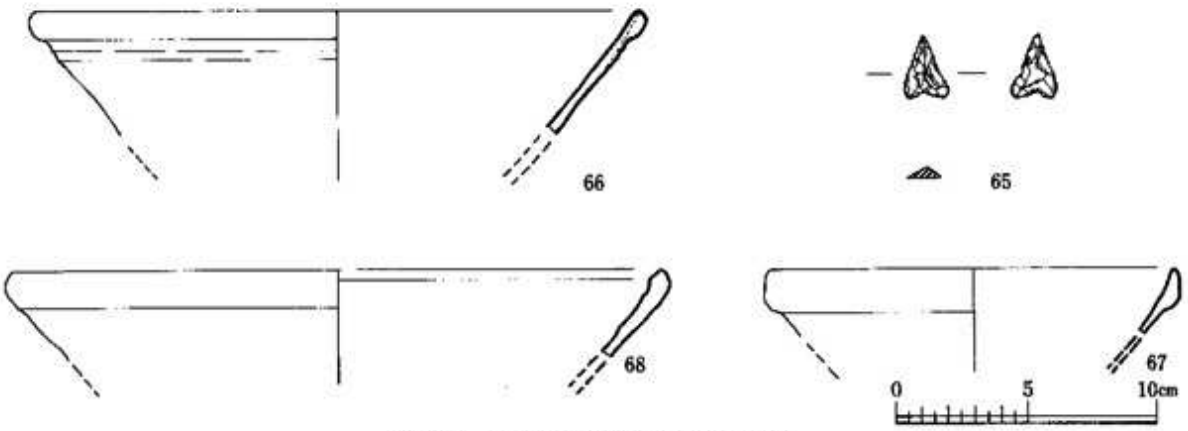
口縁折り返し（玉縁）の青白磁の鉢である。[15] 胎土は緻密で、地肌の色は灰色、釉は乳青灰色である。

陶磁器碗（67）

口縁部が外方向に拡張し、やや丸味を帯び厚い。端部は上方に鋭く尖っている。胎土は精良な粘土を使用しており、地肌は灰色で、釉は灰緑色である。

瓦質鉢（68）

口縁端部先端は、少し角を持つようにつまみあげられ、端面はやや丸味を帯びている。口縁端端部内外に、スス付着がみとめられる。（楠山）



第25図　虫取遺跡第4地点出土遺物

第　5　地　点　板原326―3　（第26図）

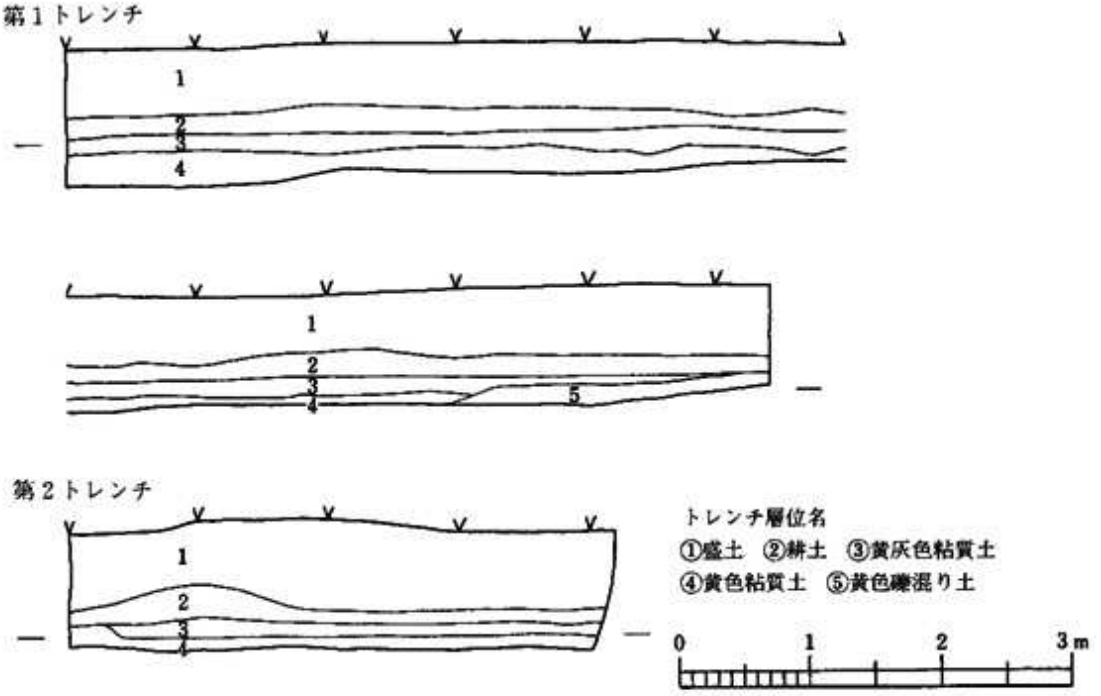
住宅建設に先立つ調査である。調査地点の中央に約1m幅で約11mの第1トレンチと、約1m

幅で約4mの第2トレンチをもうけて、断面観察を行なった。

第1トレンチは盛土約50cm、耕土約16cm、黄灰色粘質土約12cmで黄色粘質土になる。

第2トレンチは盛土約50cm、耕土約10cm、黄灰色粘質土約10cmで黄色粘質土となる。

黄灰色粘質土および黄色粘質土から、古墳時代の土師器片が出土している。　（楠山）



第26図　虫取遺跡第5地点トレンチ断面図

(引用文献)

① 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会 1965・10

② 『和気』 和気遺跡調査会 1979・3

③ 『豊中・古池遺跡発掘調査概報 その Ⅲ』 豊中・古池遺跡調査会 1976・3

④ 『古池北遺跡調査概要』 大阪府教育委員会 1974

⑤ 『板原遺跡試掘調査報告』 豊中・古池遺跡調査会 1977・3

⑥ 『府中遺跡発掘調査概要 Ⅱ』 和泉市教育委員会 1978

⑦ 『池上遺跡・第2分冊土器編』 大阪文化財センター 1979・3

⑧ 『万町北遺跡現地説明会資料』 和泉丘陵内遺跡調査会 1983・3・12

⑨-a 『池上遺跡発掘調査概要 Ⅱ』 大阪府教育委員会 1974・3

-b 石神 怡 「池上弥生ムラの変遷」 『考古学研究』第22巻4号 1977・3

-c 『池上遺跡発掘調査概要 Ⅵ』 大阪府教育委員会 1981・3

⑩ 中井貞夫 「泉大津市池浦遺跡発掘調査概要」 『節・香・仙』第22号 大阪府教育委員会 1972

⑪ 『七ノ坪遺跡現地説明会資料』 大阪府教育委員会 1982・2

⑫ 「和泉の古代遺跡」 『和泉考古学』第5号 泉大津高校地歴部 1961

⑬ ⑧と同じ

⑭ 『観音寺山弥生集落調査概要』 観音寺山遺跡調査団 1968

⑮-a 『信太山遺跡調査調査概報』 信太山遺跡調査団 1966

-b 『鶴山台地区信太山遺跡 その2』 和泉市教育委員会 1970

⑯ 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員委員会 1974・3

⑰ ⑪と同じ

⑱ 『七ノ坪遺跡発掘調査概要 Ⅱ』 泉大津市教育委員会 1982・3

⑲-a 『泉大津市東雲遺跡見学会資料』 豊中・古池遺跡調査会 1977・6・9

-b 『東雲遺跡発掘調査報告書』 豊中・古池遺跡調査会 1977・12

-c 坂口昌男 「市内の遺跡と発掘調査」 (古代史入門講座資料) 泉大津市社会教育課 1982・8

⑳ ⑬と同じ

㉑ ⑲と同じ

㉒ 『豊中遺跡発掘調査概要 Ⅲ』 泉大津市教育委員会 1979・3

㉓ 坂口昌男 「六師薬師寺発掘調査報告」 1973・10

㉔ ⑧と同じ

㉕ ⑲と同じ

㉖ 『要池遺跡発掘調査概要 1』 大阪府教育委員会 1975・3

㉗ ㉒と同じ

㉘ 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 1』 泉大津市教育委員会 1983・3

㉙-a 『和気』 和気遺跡調査会 1979・3

-b 『和気Ⅱ』　和気遺跡調査会　1981・9

㉚　⑧と同じ

㉛　③と同じ

㉜-a 『豊中遺跡発掘調査概要Ⅱ』　泉大津市教育委員会　1978・3

-b ㉒と同じ

㉝　『豊中遺跡発掘調査概要Ⅳ』　泉大津市教育委員会　1980・3

㉞　㉝と同じ

㉟　白石太一郎　「越智氏居館出土の瓦器―瓦器の終末年代に関連して―」『古代学研究』　第85号　古代学研究会　1977・11

㊱　『陶邑Ⅱ』　大阪府教育委員会　1977の編年

㊲　⑤と同じ

㊳　『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報―板原遺跡―』　大阪府教育委員会　1980・3

㊴　㊳と同じ

㊵　『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』　大阪府教育委員会　1981・3

㊶　滋賀里式については、大阪市史編纂所の前田豊邦氏の御教示を得た。

㊷　田中　琢　「瓦器と黒色土器について」『日本の考古学Ⅵ・歴史時代上』「古代・中世における手工業の発達」の1窯業(4)畿内。河出書房

㊸　⑫と同じ　田中　琢　「Ⅰ・土師器を生産した人びと」

なお、昭和57年度豊中遺跡発掘調査の第3地点　『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報1』泉大津市教育委員会　1983・3　においても、田中　琢氏分類法によるa手法の高盤が1点出土している。

㊹　玉縁の青白磁については、神谷正弘氏、貴志正則氏の御教示を得た。

遺物観察表

豊中遺跡

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
1	(高台径) 3.6	(残存高) 1.0	精良な粘土を使用。 灰褐色	内外面はナデ。	第1トレンチ・ 黄灰色粘質土	瓦器椀 13世紀前中期～後期 焼成：良好
2	13.6	3.7	2㎜程度の白色粒を数個と微砂粒を少し含む。 灰色	内外面はヨコナデ。	第2トレンチ・ 明灰色粘質土	須恵器杯蓋 焼成：良好

虫取遺跡　第1地点

弥生土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
3	25.0	(残存高) 7.8	1㎜から2㎜程度の白色粒を含む。 内面―乳赤褐色 外面―乳茶色	内面はナデ。 外面はヨコナデ。	東トレンチ	広口壺 第Ⅰ様式新段階 沈線は5条 焼成：良好
4	21.1	(残存高) 5.3	2㎜から3㎜程度の白色粒を含む。 内面―乳赤褐色 外面―乳茶色	内面はヨコナデ。 外面頸部はタテハケ。	暗茶色粘質土	壺 第Ⅰ様式新段階 焼成：良好
5	24.5	(残存高) 4.0	1㎜から3㎜程度の白色砂粒・黒色砂粒を含む。 内面―乳茶色 外面―暗茶色	内面はヨコナデ。 外面はナデ。	東トレンチ北地区・暗茶色粘質土	甕 第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式 大和型の可能性あり。 口唇部が面を作り、細い刻み目がある。 焼成：良好
6		(残存高) 5.5	1㎜から2㎜程度の白色砂粒・黒色砂粒を含む。 内面―乳茶色 外面―乳茶褐色	内面はヨコナデ。 外面はハケ目。	東トレンチ北地区・暗茶色粘質土	壺 第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式 焼成：良好
7	29.4	(残存高) 4.4	2㎜程度の砂粒を少し含む。 茶褐色	内外面はナデ。	東トレンチ北地区・暗茶色粘質土	壺 第Ⅰ様式 焼成：良好
8	28.4	(残存高) 4.5	2㎜程度の砂粒を多く含む。 赤褐色	内面はナデ。 外面口縁部はハケ目。 外面胴部はナデ。	東トレンチ	壺　第Ⅰ様式新段階・外面胴部上方に貼り付け突帯1条。 焼成：良好

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
9	—	(残存高) 4.9	内面に2mm程度の白色砂粒・黒色砂粒を多く含み、外面に少し含む。 内面—乳茶褐色 外面—茶褐色	内外面はナデ。	東トレンチ北地区・暗茶色粘質土	甕　第Ⅰ様式新段階・外面胴部に刻み目の貼り付け突帯3条。櫛状のもので沈線を書いている。外面にスス付着。 焼成：良好
10	—	(残存高) 4.9	1mmから2mm程度の白色砂粒・黒色砂粒を含み、5mm程度の白色石を2ヵ所含む。 内面—乳茶褐色 外面—乳白茶褐色	内外面はナデ。	東トレンチ南地区	破片　第Ⅰ様式新段階 外面に刻み目の貼り付け突帯4条。 焼成：良好
11	29.6	(残存高) 5.7	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 内面—明茶褐色 外面—暗茶褐色	内面はナデ。 外面はハケ目。(タテのハケ目が先でヨコのハケ目が後で入れられた。)	東トレンチ北地区	甕 第Ⅱ様式 焼成：ほぼ良好
12	—	(残存高) 4.4	1mmから2mm程度の灰白色粒・灰色粒を含む。 内面—乳白褐色 外面—乳茶褐色	内面はナデ。 外面はヘラケズり。 外面底部は指押え。	茶色砂質土	壺 焼成：良好
13	—	(残存高) 5.0	2mmから4mm程度の砂粒を少し含む。 茶色	内面はナデ。 外面はタテハケ目。	東トレンチ	焼成：良好
14	—	(残存高) 5.7	微砂粒を少し含む。 乳茶褐色	内外面はナデ。 内面底部は指押えが残る。	東トレンチ	焼成：良好
15	—	(残存高) 4.1	2mm程度の砂粒を多く含み、5mm程度の白色石を含む。 乳茶色	剥離のため調整不明。	東トレンチ	焼成：良好
16	—	(残存高) 8.6	2mmから4mm程度の乳灰色粒を多く含む。 茶褐色	内面体部はナデ。 内面底部はタテヘラ押え。 外面はナデのうえ、ヨコヘラ。	東トレンチ	変形土器の底部 底部にスス付着。 焼成：良好
17	—	(残存高) 9.4	1mmから2mm程度の白色粒・黒灰色粒を含む。 乳白褐色	内面はナデ。 内面底部は指押えが残る。 外面はハケ目。	東トレンチ	壺 底部は円盤を使い、胴部と接合。 焼成：良好
18	—	(残存高) 3.2	2mm程度の白色粒・黒色粒を多く含む。 内面—乳白茶色 外面—乳褐色	内面底部は指押えが残る。 外面はタテヘラ削り。	東トレンチ北地区	甑器 (底部に穿孔有り) 焼成：良好

土製品

No.	法量(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
19	大きさ5.3×1.5	微砂粒を少し含む。 茶褐色	全体ナデ。	暗茶色粘質土	土師質土錘 棒状形土錘である。 貫通孔の直径6mm。 焼成：良好

石製品

No.	法　量(cm)	石材・色調	加　工	出土場所(層)	備　考
20	大きさ2.6×1.4 最大厚 0.2	サヌカイト。 黒灰色	二等辺三角形のサヌカイト片を利用して、二辺の両側を細加工。	東トレンチ	石鏃
21	大きさ2.3×1.5 最大厚 0.4	サヌカイト。 灰黒色	二等辺三角形のサヌカイト片を利用して、二辺の両側を細加工。	茶色砂質土	石鏃
22	大きさ3.5×0.7 最大厚 0.4	サヌカイト。 灰黒色	基部のみで先細りにして、両面細加工。	暗茶色粘質土	石錐
23	大きさ4.3×4.4 最大厚 0.7	緑色片岩。 緑色	両面研磨。 刃部は一辺を研磨により薄く鋭く加工。 背面は丸味。	黄色粘質土	石庖丁
24	大きさ6.2×7.1 最大厚 3.5	砂岩。(和泉砂岩) 灰色	外部全面磨き加工。	茶色砂質土	石斧 河原石
25	大きさ7.2×4.5 最大厚 1.1	砂岩。(和泉砂岩) 灰色	外部全面磨き加工。	東トレンチ中地区	石斧片
26	大きさ9.3×10.8 最大厚 3.5	砂岩。(和泉砂岩) 灰色	河原石の長軸の両端部を打ち欠いて作られている。	東トレンチ(上層)	石錘 漁網の沈子として使用した可能性あり。

須恵器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　整	出土場所(層)	備　考
27	11.8	4.0	1mm程度の白色砂粒・黒色砂粒を含み、3mmから4mm程度の白色砂粒を少し含む。 青灰色	内外面は回転ナデ。	黄色粘質土	杯・蓋 第1型式3段階 焼成：良好
28	13.2	(残存高) 5.2	1mm程度の灰色砂粒・茶色砂粒を含み、内面は1.5mm程度の白色砂粒を少し含む。 内面—乳茶色 外面—乳茶灰色	内外面は回転ナデ。	暗茶色粘質土	杯・蓋 第II型式2段階 焼成：還元不十分
29	10.8 (受部径) 12.0	4.9 (立ち上がり高) 1.3	0.5mm程度の白色微砂粒と、1mm程度の黒色粒を含む。 青灰色	内外面は回転ナデ。 外面底部にヘラ削り有り。	暗茶色粘質土	杯・身 第I型式5段階 焼成：良好
30	12.8 (つまみ径) 2.8	5.0 (つまみ高) 0.6	0.5mm程度の灰色微砂粒・白色微砂粒と、2mm程度の白色砂粒を含む。 灰色	内面と外面体部・つまみは、回転ナデ。 外面天井部にヘラ削り有り。	暗茶色粘質土	有蓋高杯の蓋 第I型式5段階 焼成：良好

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
31	13.3 (つまみ径) 3.4	5.1 (つまみ高) 0.8	1㎜程度の黒色砂粒・白色砂粒と5㎜程度の灰色砂粒を少し含む。 灰色	内面と外面体部・つまみは、回転ナデ。 外面天井部にヘラ削り有り。	黄色粘質土	有蓋高杯の蓋 第Ⅱ型式1段階 焼成：良好
32	9.3 (高台径) 7.6	9.0 (高台高) 4.3	0.1㎜から0.5㎜の白灰色微砂粒を少し含み、2㎜から4㎜の灰色石を数ヵ所に含む。 灰色	内面杯部・脚部と外面体部・脚部は回転ヨコナデ。底部に回転ヘラ削り有り。	東トレンチ・暗茶色粘質土	高杯 第Ⅰ型式4段階 長方形の三方すかし有り。 焼成：良好

土師質土器

No.	法量(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
33	3.6	ほぼ精製土であるが黒色微砂粒・白色微砂粒を含む。 乳茶褐色	把手部の下は指押え、上はナデ。	溝1	土師質鍋の把手片 把手下面にスス付着。 焼成：良好

虫取遺跡　第2地点

石製品

No.	法量(cm)	石材・色調	加工	出土場所(層)	備考
34	大きさ 4.3×2.7 (残存長) 最大厚 0.5	サヌカイト。 灰黒色	二等辺三角形のサヌカイト片を利用して、一辺の両側を細加工。	東トレンチ	石鏃片
35	大きさ 3.9×2.7 最大厚 0.8	サヌカイト。 灰黒色	剥離面を両面に残す縦長の剥片を利用して、一辺を調整し、直線的な刃部をつくっている。	東トレンチ	不定形刃器
36	大きさ 2.6×4.3 最大厚 0.6	サヌカイト。 灰黒色	剥離面を両面に残す横長の剥片を利用して、最長の一辺を調整し、直線的な刃部をつくっている。	耕土	不定形刃器
37	大きさ 6.2×5.3 最大厚 3.0	砂岩。 灰色	外部全面磨き加工。	十字トレンチ	石斧片(太型蛤刃石斧)

土師器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
38	18.2	(残存高) 6.2	2㎜程度の石英粒を少し含み、微砂粒を含む。 内面一薄茶色 外面一茶褐色	内面はヨコナデ。 外面口縁部はナデ、胴部はヨコナデのうえ、横描き日。	暗灰色粘質土	甕 焼成：ほぼ良好

須恵器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
39	12.8	(残存高) 4.1	砂粒を少し含む。 内面—薄灰色 外面立ちあがり部—薄灰色 外面受部以下—暗灰色	内外面はナデ。	十字トレンチ	杯 第Ⅱ型式2段階 焼成：良好
40	— (高台径) 8.7	(残存高) 7.0 (高台高) 5.8	1㎜から3㎜程度の砂粒を含む。 内面—灰色 外面—暗灰色	内外面は回転ナデ。	暗茶色粘質土	高杯 第Ⅰ型式5段階 脚部外面に自然釉がほどこされている。 焼成：良好
41	—	(残存高) 4.5	微砂粒を含む。 灰色	内外面は回転ナデ。	東トレンチ	高杯(脚部) 細太りの長方形の四方すかし有り。 焼成：良好
42	28.0	(残存高) 4.5	微砂粒を少し含む。 内面—淡灰色 外面—灰色	内外面は回転ナデ。	試掘坑	甕 内面にスス付着。 焼成：ほぼ良好
43	36.0	(残存高) 8.8	微砂粒を含む。 内面—灰色 外面—暗灰色	内外面はナデ。	東トレンチ	甕 外面に自然釉がほどこされている。 焼成：良好

土師質土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
44	12.6	(残存高) 2.8	微砂粒を少し含む。 茶褐色	内外面はナデ。	試掘坑	杯 焼成：良好

黒色土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
45	11.0	(残存高) 1.8	微砂粒を少し含む。 内面—黒色 外面—茶色	内外面はナデ。	暗茶色粘質土	皿 焼成：良好

土製品

No.	法量(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
46	大きさ 2.5×1.2 (残存長)	1㎜程度の砂粒を多く含む。 乳茶色	ヘラナデ。	暗茶色粘質土	土師質土錘 円柱形土錘である。 焼成：良好

虫取遺跡　第3地点

弥生土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所	備考
47	—	(残存高) 3.0	1mmから2mm程度の白色粒を少し含む。 乳赤茶色	内面はナデ。 外面はヨコナデ。	方形落ち込み 黒灰色粘質土	壺形土器(破片) 第Ⅰ様式新段階 刻み目の貼り付け突帯有り。　焼成：良好

土製品

No.	法量(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
48	大きさ 2.4×0.9	微砂粒を少し含む。 赤茶色	全体ナデ。	黄灰色粘質土	土師質土錘 管形土錘である。 貫通孔の直径6mm。 焼成：良好
49	大きさ 3.4×1.1 (残存長)	精良土。 乳赤茶色	摩滅のため調整不明。	南地区・ 黄灰色粘質土	土師質土錘 棒状形土錘である。 焼成：良好
50	大きさ 2.8×1.6	微砂粒を少し含む。 乳茶色	指押え。	黄灰色粘質土	土師質土錘 棒状形土錘である。 焼成：良好

石製品

No.	法量(cm)	石材・色調	加工	出土場所(層)	備考
51	大きさ 3.6×1.8 (残存長) 最大厚 0.7	サヌカイト。 灰黒色	二等辺三角形のサヌカイト片を利用して、二辺の両側を細加工。	南地区・ 黄灰色粘質土	石鏃片
52	大きさ 4.2×1.1 最大厚 0.7	サヌカイト。 灰黒色	二辺の両側を細加工。	黄灰色粘質土	石鏃
53	大きさ 4.1×1.8 (残存長) 最大厚 0.8	サヌカイト。 灰黒色	二辺の長辺の両側を細加工。	黄灰色粘質土	石槍片

須恵器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
54	13.6	4.4	0.2mmから0.8mm程度の白色砂粒を含む。 黒灰色	内外面は外転ナデ。	東トレンチ	杯・身 第Ⅰ型式3段階 焼成：良好
55	11.3	4.4	0.1mmから0.8mm程度の白色砂粒・灰黒色砂粒を含む。 白灰色	内面底部はヨコナデ。 内面体部と外面は回転ナデ。	暗茶灰色粘質土	杯・身 第Ⅳ型式1段階 焼成：良好
56	12.4	3.9	精緻土であるが、0.5mm程度の黒色砂粒を少し含む。 青灰色	内外面は回転ナデ。	東トレンチ (北地区)・ 灰茶色粘質土	杯・身 第Ⅳ型式4段階 焼成：良好

その他の遺物

No.	法　量(cm)	胎土・色調	調　整	出土場所(層)	備　考
57	口径 5.2 器高 1.3	微砂粒を少し含む。 赤褐色	剥離のため、調整不明。	東トレンチ	土師質小皿 焼成：不良
58	口径15.8 器高(残存高) 3.4	微砂粒を少し含む。 茶褐色	内外面はナデ。	東トレンチ・ 灰茶色粘質土	土師器杯 焼成：良好
59	口径19.2 器高(残存高) 2.8	2.5mm程度の茶色粒を少し含み、微砂粒を含む。 茶褐色	内面と外面立ちあがり部は、回転ナデ。 外面底部は指押えが残る。	北地区・ 灰茶色粘質土	土師質盤 焼成：良好
60	口径13.8 器高(残存高) 5.9	微砂粒を少し含む。 内面―暗灰茶色 外面―茶色	内面胴部はタテヘラナデ。 内外面口縁部は回転ナデ。 外面胴部はタテハケ目。	東トレンチ (北地区)・ 灰茶色粘質土	土師質甕 焼成：良好
61	(残存高) 4.1	微砂粒を少し含むが、精良粘土使用。 茶褐色	内面は指押えが残る。 外面はヘラナデ。	黄色粘質土	土師質高盤 焼成：良好
62	4.2	0.1mmから0.3mm程度の白色砂粒を少し含み、1mm程度の灰白色石を含む。 乳白褐色	把手部の下は指押え、上は剥離のため調整不明。	黄灰色粘質土	土師質鍋の把手片 焼成：良好
63	4.6	0.1mmから0.5mm程度の白色微砂粒を含む。 乳茶褐色	把手部の下は指押えのうえからナデ、上はナデ。	黄灰色粘質土	土師質鍋の把手片 焼成：良好
64	5.4	0.3mmから1mm程度の白色砂粒・灰色砂粒を含む。 乳褐色	把手部の下はナデのうえから指押え、上はナデ。	東トレンチ	土師質鍋の把手片 焼成：良好

虫取遺物　第4地点

石製品

No.	法　量(cm)	石材・色調	加　工	出土場所(層)	備　考
65	大きさ1.7×2.4 最大厚 0.4	サヌカイト。 灰黒色	二等辺三角形のサヌカイト片を利用して二辺の両側を剥加工。	黄色粘土	石鏃

陶磁器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　整	出土場所(層)	備　考
66	23.1	(残存高) 4.8	緻密。 素地―乳灰色 釉　乳青灰色	内外面はナデ。	東トレンチ	青白磁口縁折り返し(玉縁) 焼成：良好
67	15.4	(残存高) 2.6	精良な粘土を使用。 素地―灰色 釉―灰緑色	内外面は回転ナデ。	耕土	陶磁器・碗 焼成：良好

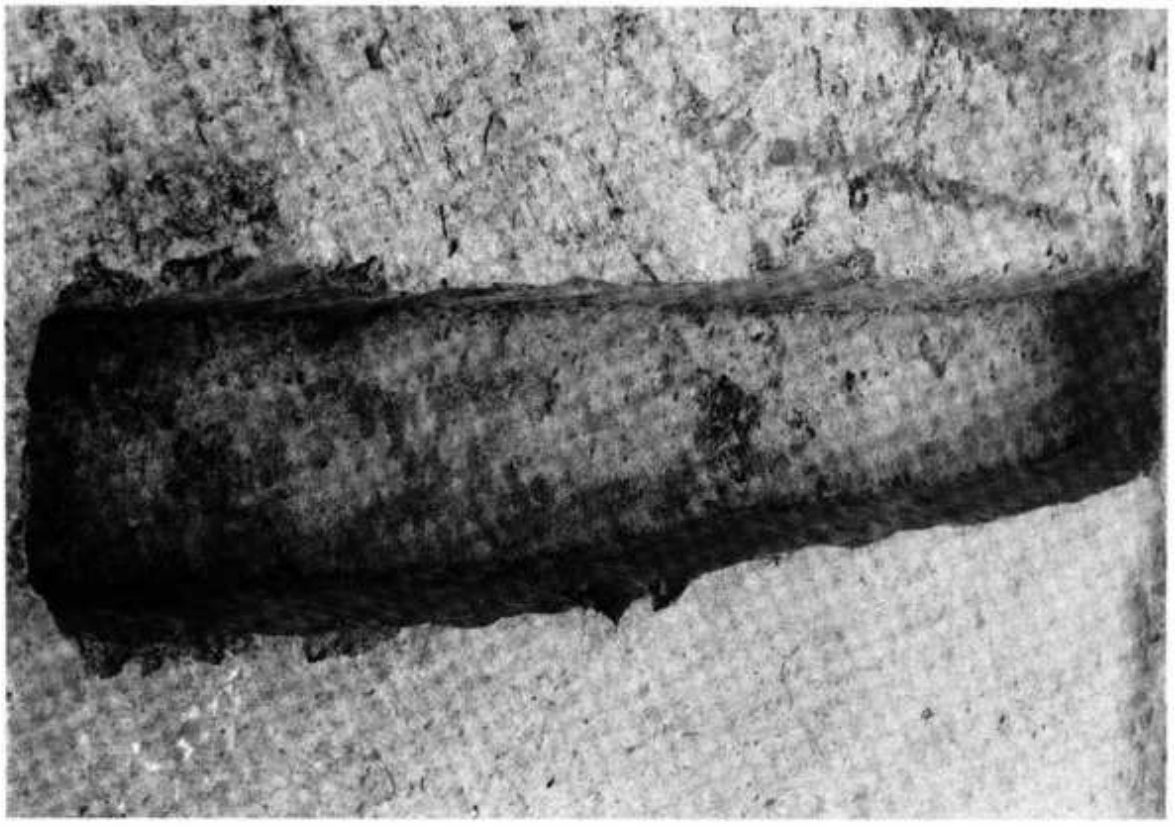
瓦質土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土地点(Kg)	備考
68	24.7	(残存高) 3.4	1mm程度の砂粒を数ヶ所に含み、微砂粒を含む。 乳灰色	内外面は回転ナデ。	東トレンチ	鉢鉢 口縁部にスス付着。 焼成：良好

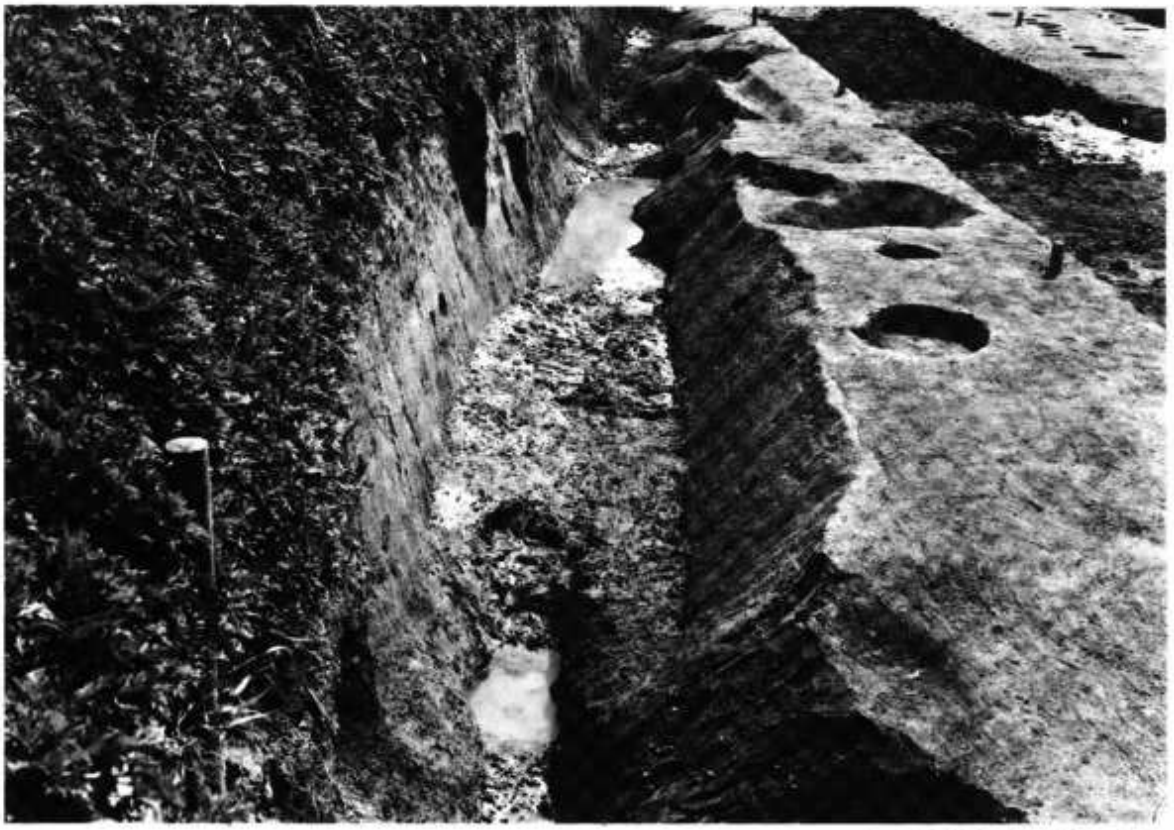
(楠山・畑中)

図　　版

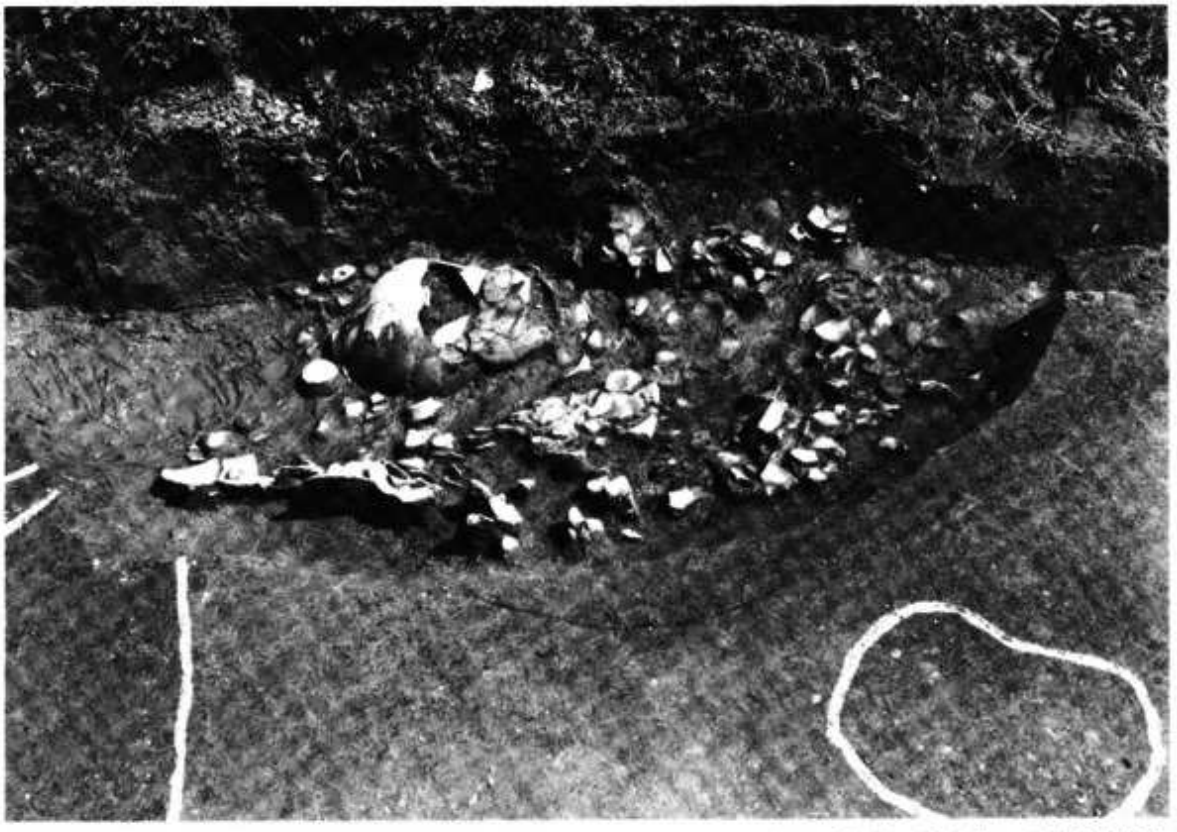
豊中遺跡第１トレンチ



板原遺跡第１地点トレンチ

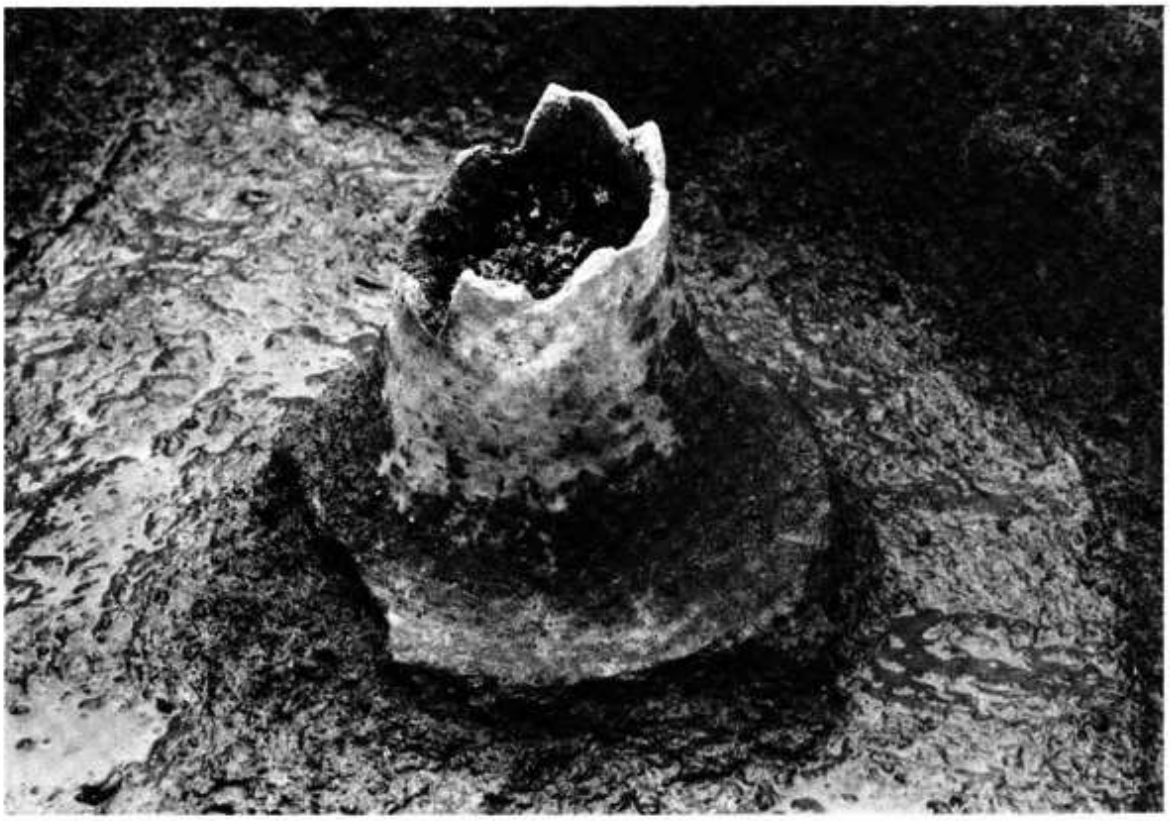


虫取遺跡第1地点溝4全景

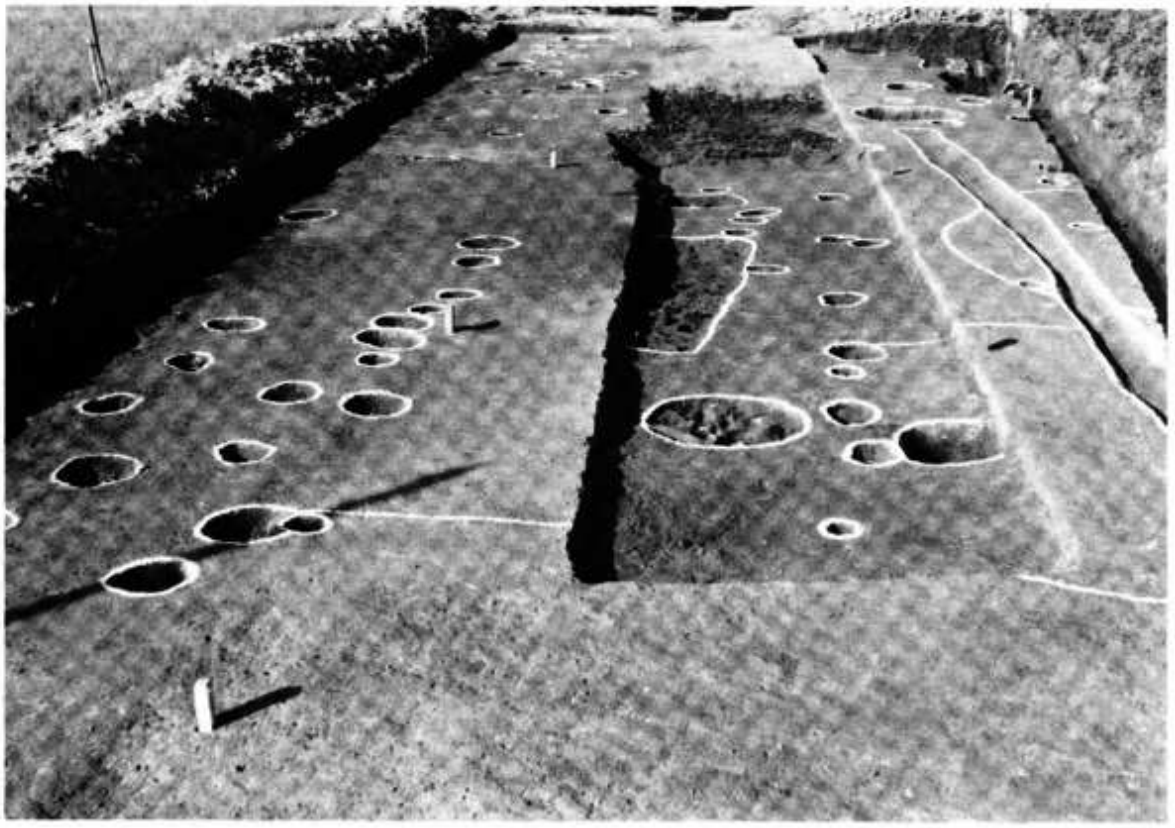


虫取遺跡第1地点溝4土器出土状態

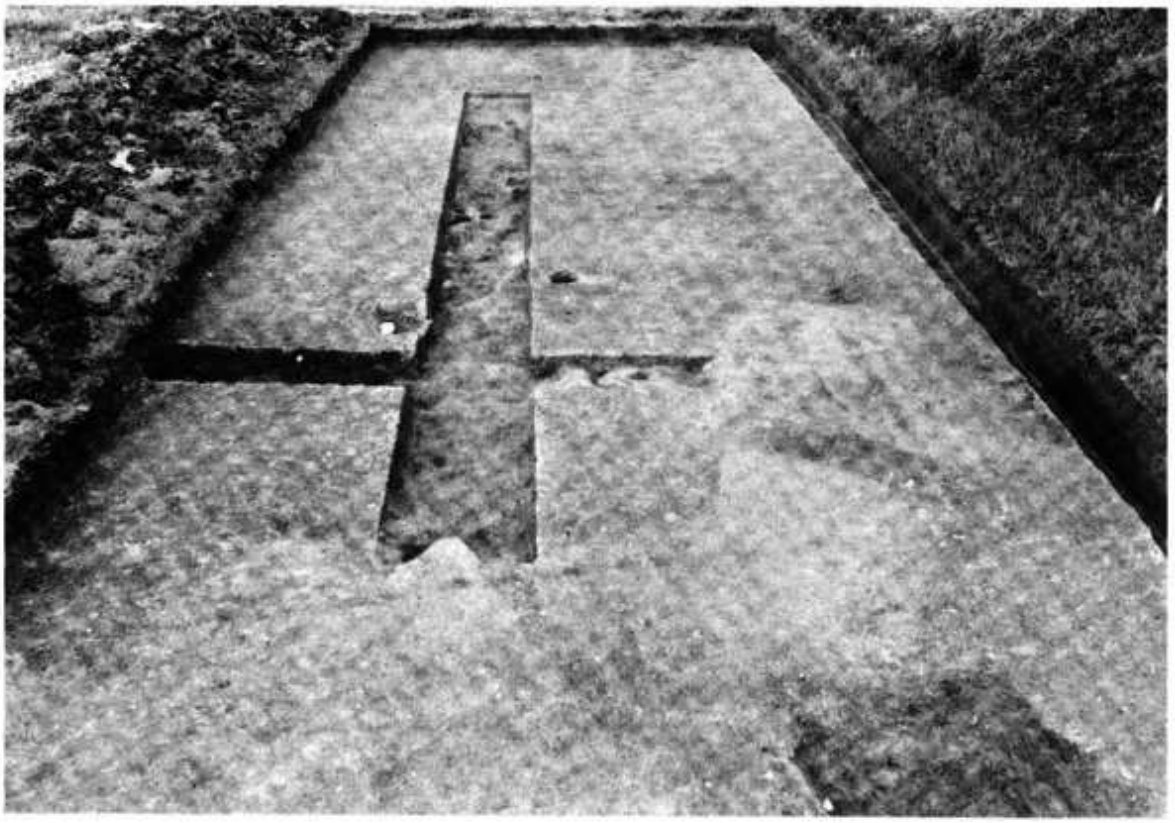
虫取遺跡第１地点土器出土状態



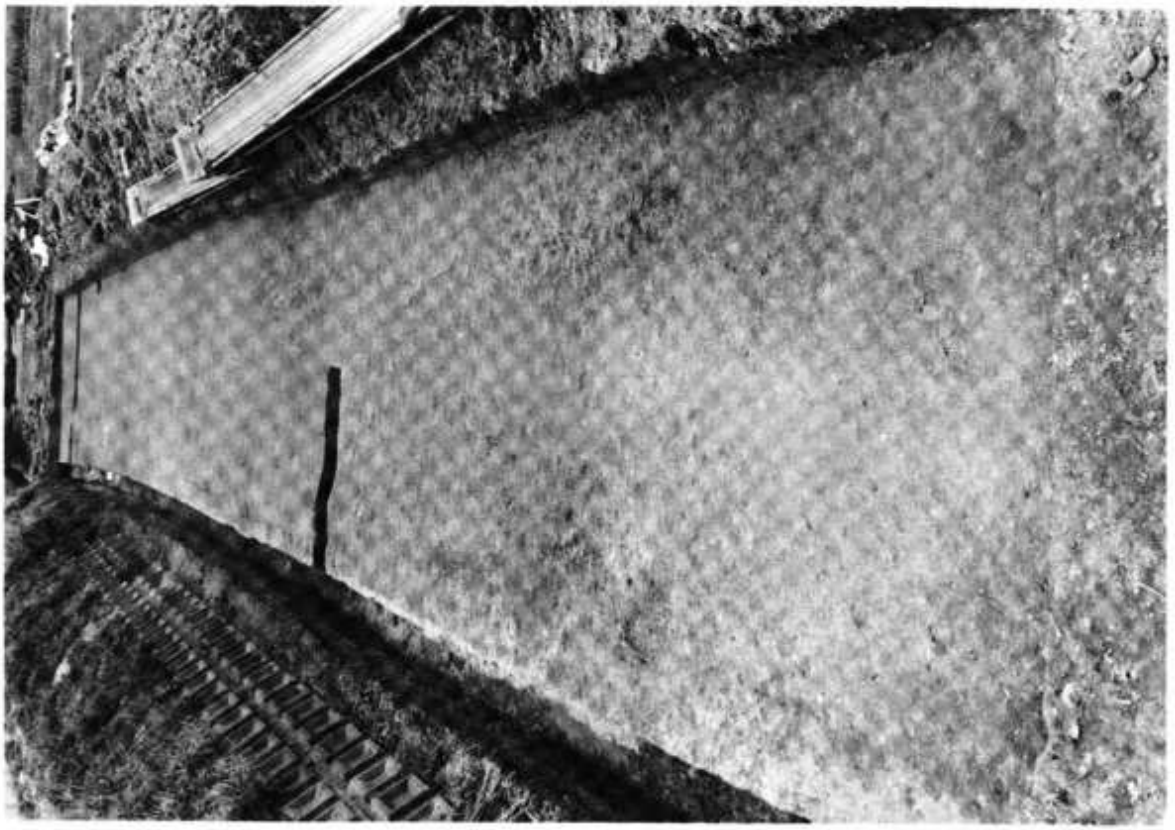
虫取遺跡第１地点西トレンチ土器出土状態



虫取遺跡第１地点遺構全景

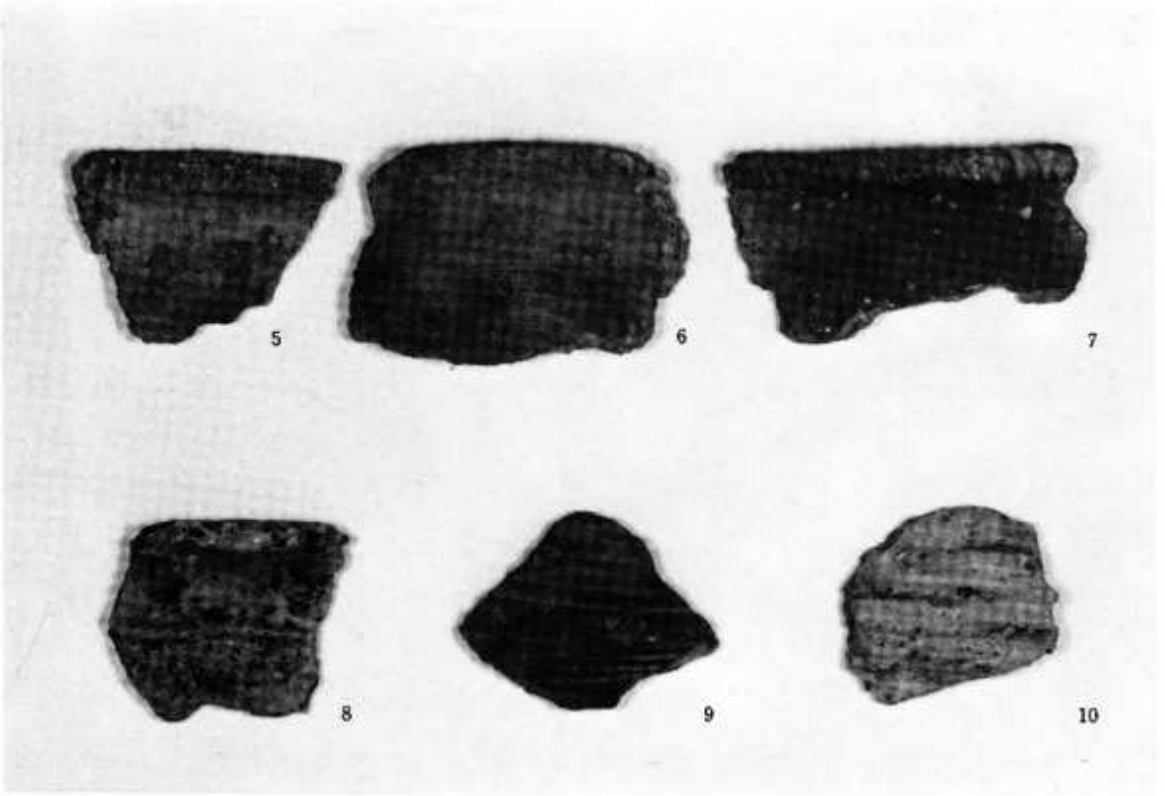


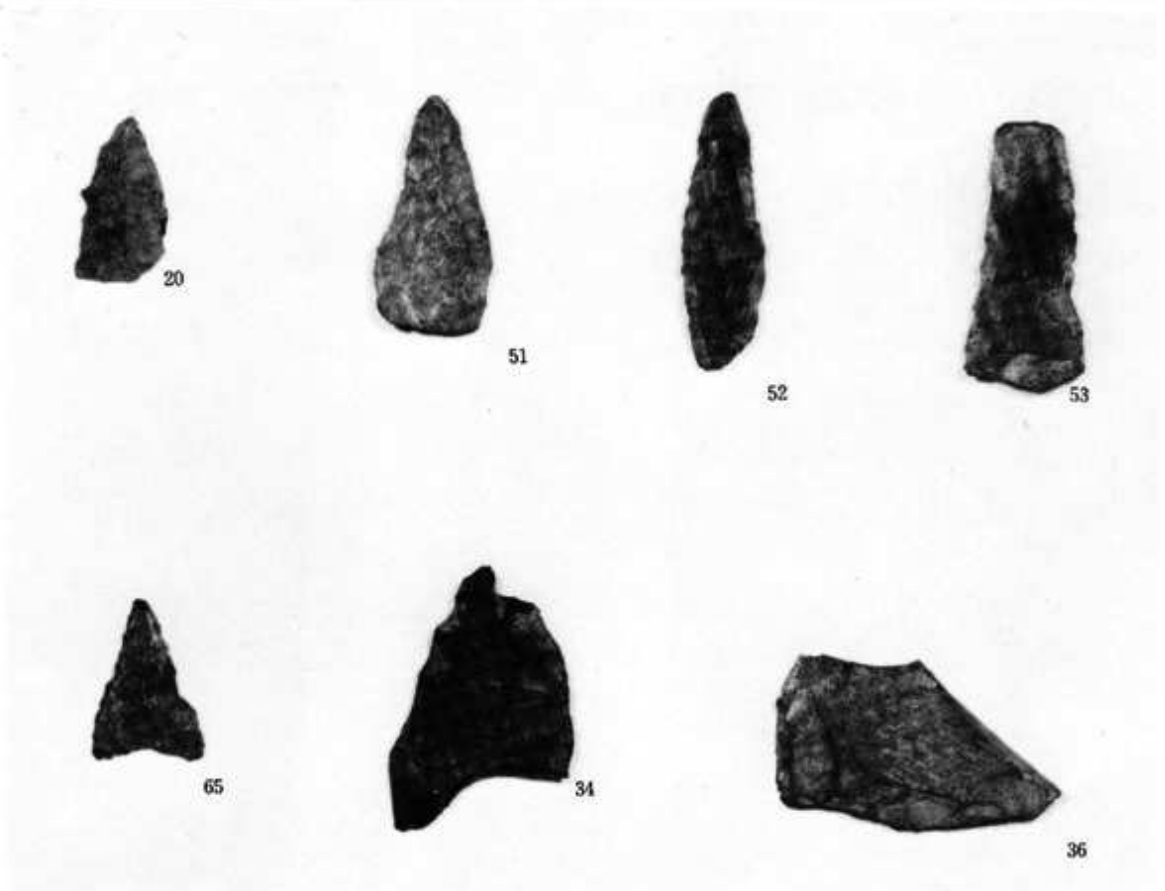
虫取遺跡第２地点全景



虫取遺跡第３地点全景

虫取遺跡第５地点第２トレンチ

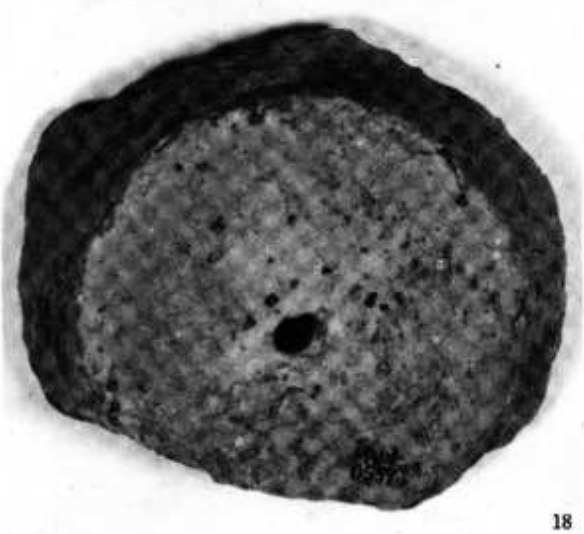




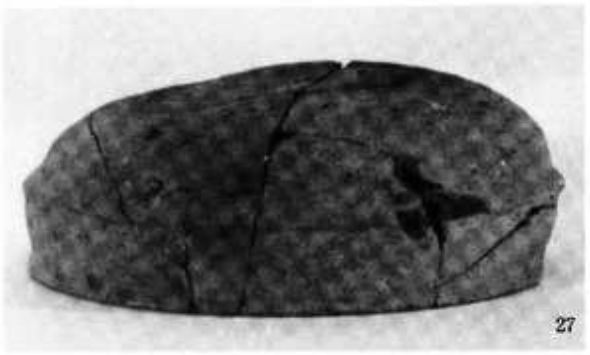
出土遺物

16

17


18

30


27

32

29

37

25

出土遺物

泉大津市文化財調査報告9
泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2

1984年3月

発行　泉大津市教育委員会
編集　社会教育課
　　泉大津市東雲町9番12号
印刷　株式会社 中島弘文堂印刷所
　　大阪市東成区深江南2丁目6番8号